
太陽と海の皇子(旧題 奇跡の雨男)

橘 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽と海の皇子（旧題 奇跡の雨男）

【Nコード】

N72030

【作者名】

橘 明

【あらすじ】

光と闇がせめぎあう古代の世界に

平凡な高校生の俺、青空太陽は、なぜか飛ばされてしまう。

そこで、美少女の巫女イヨと出会い龍神だと勘違いされてしまった。冥王の花嫁になり人生に絶望して自殺するだったはずだったイヨ。

しかし、皮肉にもそれがきっかけで

この世界に光がもたらされるはずだった。

けれど、俺との出会いで、

イヨの心に希望の光が射し込み、自殺願望は消えて
世界の運命は変わってしまったらしい。

そして、新たな時の流れの中で

イヨとともに救世主に任命されてしまう俺。

そしてついに冥王が登場……したらしい……

「とても恐ろしいけれど、とても美しい方でしたわ」

（目撃者・談）

古代を舞台にしたスピリチュアル・ファンタジー（になる予定）

1 (前書き)

異世界トリップやってみたかったもんで書いてみました。深く考えずに読めるエンタテイメントめざします。よろしく。

名は体をあらわすというが、必ずしもそうとは限らないだろう。良すぎる名前はかえって良くないという。例えば幸子なんて名前をつけられた女性は、往々にして幸せになれなかったりするという。また、光という名前は女性には強すぎて、この文字を持つ女性は気が強く、男勝りなため、結婚できないなんて話もきく。そういった良すぎて悪い文字の中に、陽という字も含まれるんじゃないだろうか？

俺の名前は青空太陽。昔の少年マンガの主人公みたいなベタな名前である。一見して、元気でポジティブなキャラを想像するかもしれない。その通り、俺は無駄にポジティブで、元気で、落ち着きがない。しかし、ここで問題にしたいのは、人格の事ではない。とりあえず、俺が、太陽という名前がいやみに聞こえるぐらいの、ありえないの雨男だということである。

子供のころから、運動会、遠足、修学旅行等のイベントが一度として晴れたことがない。一番印象深い思い出は、中2の頃、無理矢理雨天決行した登山で大雨に降られ、ほうほうのていで下山し、一歩山から離れた途端に待ってましたとばかりに雲間から太陽が顔を覗かすという究極の嫌がらせ（天気からの）を受けた事である。その他、修学旅行で伊勢神宮に行けば、背後から雨雲が追いかけて来て大雨をふらせ、あまつさえゴロゴロと雷が鳴り出したりとか、デイズニールランドに行けば、雨の為にアトラクションが中止になったりとか、しまいに同級生の間から『絶対にこの学年にはタチの悪い雨男がいる』という犯人さがしがはじまり、12年を通して非常に肩身のせまい思いをしていたことはまだ誰にも打ち明けていない秘密であるが、そんなことよりもっと悲劇的なのは、この体質が原因で数多の女性にふられたことである。数多といっても1人し

かないのは究極の秘密である。そのたった1人の彼女に振られた時の言葉が今も胸をえぐる。

「傘持って歩くの、ちょーウザイし！」

まあ、無理もない。俺だって出かけるたびに傘を持って歩くのは正直ウザイ。まあ、それはそれとして、さすがに、これでは一生一人身ではないかと危機感を抱き始めた高2の夏、俺はついに決心して、神社でお払いをしてもらうことに決めた。

その日は西高東低の気圧配置で、全国的に快晴、と、天気予報は言っていたが、俺の周りは全国から除外されていたのか大雨がふっていた。まあ、予測済みだ。なぜなら、俺と神社は最悪の相性だからだ。そう、昔から、俺が神社に足を踏み入れると、必ずと行っているのだが、多少の情状酌量ってのがあり、稀に晴れることもあったりするのだ。しかし、神社は駄目だった。3分前までどんなに快晴でも、俺がお社をくぐった途端に土砂降に変わる。こうなるともう、一種のマジックである。

いまさら、凹むまでもなく、傘をさし祈祷殿に向かった。そこには、霊験あらたかな神官の、阿部野きよあきとかなんとかいう30過ぎのひよろつと細みのひき目かぎ鼻のナイスガイがいて、俺を待ち受けていた。

「で、今日はなんのお払いを御所望で？」

ひき目かぎ鼻の神官がのたまう。

「えゝ実は」

俺は緊張気味に言った。

「僕、すっごい雨男なので、このままでは彼女もできそうにないか

ら、お払いをして晴れ男にしてもらいたいんです」

「はあ」

阿倍野きよあき神官は奇妙な顔をした。無理もない。こんな、妙な依頼をする客は初めてなんだろう。その証拠に、阿部野青年は、以下のような失礼千万なセリフをのたまった。

「雨と彼女ができないことに因果関係はないと思いますけどねえ」
が、しかし、やってみましょう。そう頷くと、早速祝詞を唱え始めた。そうして、唱えること30分。いきなり、阿倍野神官がその場に崩れ落ちた。真っ青な顔をして、激しく息をしている。

「どうしたんです？」

心配になっておそるおそる尋ねると、神官がか細い声で言った。
「無理です。あなたには、とんでもない物が憑いている。私にはとても払えません」

「とんでもないもの？」

俺は聞き返した。

「とんでもないものって、なんですか？」

「それは……り……り……りー」

神官はそこまで言うのと、白目を向いて失神してしまった。一体なんなんだと恐ろしくなる。

それきり、いつまでたっても神官が目を覚まさないの、仕方なく神社を後にすることにした。土砂降の雨の中を歩きながら神官の言葉を思い返す。

……あなたには、とんでもない物が憑いている

とんでもないもの？ とんでもないものって何だよ？ まさか、悪霊とかいうなよ。俺は、お化けと雷は大嫌いなんだ。心の中でつぶやいたその時、その言葉に答えるようにガラガラピッシャーンと雷が鳴った。

「驚かせんな、バカヤロー!」

俺は、空に向かって激しく叫んだ。

「俺に一体何の恨みがあるんだ、コノヤロー。俺の青春を返せ!」

すると、また、激しく稲光りがした。

ピカッ!

目の前に火花が散る。

「聞こえてんのかコノヤロー! ありえない反応するな!」

端から見たら、さぞかし危ない奴に見えるだろうわけの分からない雄叫びをあげ続けていたその時。視界に小さな何かが横切る。何かと思って目をこらすと、子供がいた。10才ぐらいの、目のクリッとしたおかつぱ頭の男の子だ。その子供は水色の着物を着ていた。

「今日って。七五三だっけ?」

首を傾げた俺に向かって、子供がいきなりあっかんべーをした。

「こら」

俺は、極めて冷静に注意した。

「見ず知らずの人にあっかんべーをしてはいけません」

すると、子供は言った。

「こんなところでお払いしたって、無理だもんねえ」

「何？」

その言葉に、俺はびっくりする。

「なぜ、君が、そんな大人の事情を知ってるんだ」

「秘密だもんねえ」

男の子はそう言うと、俺の横をすり抜け階段を駆け上がって行った。

「おい！ 待てよ」

俺は、子供の後を追いかけた。あいつは、何か知っている！と第六感が告げるのだ。まあ、第六感が告げなくなたって、どう考えても知ってると思えないシチュエーションだが。しかし、後ろ姿は見えるのに、走っても走っても追いつけない。子供のくせにやけに足が早い。気がつくと俺は、神社を見おろせる程の山の中にいた。男の子は軽々と、岩上を跳ねて昇って行く。逃してなるものかと俺も岩に手をかけ、体重を移動させる。しかし、岩は雨のせいで思いのほか滑りやすくなっていて、右足をかけ損ない、俺はあっという間にバランスを崩した。そして、岩から滑り落ち、そのままどんどん下へ下へと落ちて行った。

…さま。…さま。

どこからか、可憐な声がある。あの声は、女の子の声だ。
後頭部に激痛がする。

目をあけると、ろうそくが燃えていた。天井を見れば岩、岩、岩。

いかん、記憶がとんでいる。一体俺はどうしたんだ？　そして一
体ここはどこなんだ？

「ここはどこだ？」

思いきり上体を起こした時、ガンッと音がして、デコにものすごい激痛が走った。昔の漫画的表現にすれば、目から星が出て頭の周りをひよこがぴよぴよ回るところだ。

「イタタタ〜」

つぶやくと、

「あいたたたた〜」

と同じようにつぶやく可憐な声にする。誰だ？　と思って目をあけるとそこに一人の娘がいた。16才ぐらいの、ウェイブのかかった薄茶色の髪の毛、何故か巫女さんの装束を身に纏った娘が、額をおさえている。どうやら、俺らは互いのデコどうしをぶつけてしまったらしい。

「大丈夫？」

おそろおそろ尋ねると、娘が髪を揺らしてこちらを見る。そのとたん、俺はアホのごとく動けなくなった。なぜだろうか？　それは、その娘がとてつもなく可愛かったからである。

色白で丸顔、大きなうるんだ瞳、ピンクの唇。こんな可愛い子が俺の人生に登場したことは、いまだかつてない。ぼんやりと、見とれてる俺を、少女の方もボヤーンと見ていた。お互いに固まること10秒。いきなり娘が俺の手をつかんでこちらに顔を近付けて来た。

え？　何？　何？

驚く俺。

「やめてください！　心の準備がまだ！　でも、どうしても言うならぜひ！」

と間抜けなことをのたまった俺に向かって娘が言った。

「あなた、龍神様ですよ」

「え？ リュージン？」

「そう。龍神様ですよ」

「リュージンって、龍に神と書く龍神の事？」

俺の言葉に娘がきょとんとした表情を浮かべる。

「龍神様とは龍の神様だとババ様に教わりましたわ。私は、この洞窟にこもってずっとあなたを呼んでいたのですわ」

真剣なその娘の表情に俺は哀れみを覚えた。気の毒に、この娘、可愛いのにどうやら頭が少し弱い、もしくは極度の妄想壁があるらしい。まったく、天は2物を与えずというが……。

俺はとびきり優しい声で娘の言葉を否定した。

「あのね、違うよ。僕は人間だよ」

すると、娘がぶんぶんと首をふる。

「いいえ。あなたは龍神様ですわ」

「違うんだよ。あのね、この世に龍神とか、カボチャ大王とか、サントクロースっていうのはいないんだよ」

「でも……」

娘が泣きそうな顔をする。しまった、この子の夢を壊してしまっただか。何も、あそこまで強く言わなくてもよかったかもしれない……後悔しかけた時、娘が立ち上がって俺の背後を指さして言った。

「でも、あの鏡から飛び出したのが何よりの証拠ですわ。あの中に住んでいるのは龍神様だけだとババ様から教わりましたもの」

「鏡……」

後ろを向くと、確かにそこには周りに派手な装飾のほどこされた、人の頭程の鏡がたてかけてある。あんな小さなところから出て記憶もないし、そんな器用なマネが出来るぐらいならとくにそれで食ってるだろうし……。この妄想娘。何かを見間違えたに違いない。

と勝手に自分を納得させたところ、娘がさらに言った。

「それに、何よりの証拠に、あなたが現れたとたん、雨が降り出しましたわ！　龍神様には雨を降らせる力があるとババ様から教わりましたわ！」

言われて気がついた。確かにどこからか雨の音がする。が、しかし、

「それは、俺が究極の雨男だからだよ」

と、屈辱的な理由を述べる。

しかし、冷静になって、あたりを見渡せば……。

「一体ここは、どこなんだ？」

先程娘が言ったとおり、そこは、どう見ても洞窟の中だった。振り返れば俺の背後にはしめ縄をされた大きな岩があり、てっぺんあたりに龍の彫刻がほどこされている。洞窟の入り口には井戸があって、井戸の手前には円錐の土が3つ盛られている。

どうして、俺はこんなところにいるんだろう？

記憶をたぐっていく。確か、俺はおらいをしてもらったために神社に行つて、そこで妙な子供にあって、そいつを追いかけているうちに岩から足を滑らせて……。気を失って……。それから、それから……

「ここは、龍神様の祠ですわ」

いきなり、俺の回想に割って入って娘が言う。

「龍神様の祠？」

俺は思わず彼女を見た。

「ええ。そうですわ。ここは、龍神様の祠。龍神様の住むお家のようなものだとおババ様に教わりましたわ」

「なるほどね。で、君は一体誰なの？」

「私はイヨ。神様に仕える……巫女ですわ」

「巫女さん？」

じゃあ、この格好はコスプレでもなんでもなく……

「私はここで雨乞いの祈りを捧げていたのですわ。もう、30日も祈ってやっとあなたを呼び出すことに成功したんですわ」

そう言って、イヨはうふっと笑った。

龍神の祠？ 巫女？ いや、そういうものは確かにこの世に存在するだろう。しかし、呼び出すことに成功するのはなんなんだ？

もしかして、これは、ファンタジーによくある異世界トリップってやつなんじゃないのか？ いや、そんなわけ無い。ここはきっと神社のある山の洞窟かなんかで、俺は岩から落ちて気を失ったところを彼女に助けられただけなんだ。そうさ。ああそうとも。

俺は再び一人で勝手に納得してうなずくと、立ち上がり洞窟の外に向かった。外に出ると、やはりここは山の上だったようで、まだ雨は降っているものの結構遠くまで見渡せた。しかし、俺は眼下に広がる風景を眺めて雄叫びを上げなければならなかった。

「っえー？」

なぜなら、そこにはいつも見なれているのとは似ても似つかない風景が広がっていたからだ。

足元にはどこまでも広がる森、森、森、その果てには真っ黒なカーテンのような闇が広がり、ハッキリと世界を分断している。そして、闇のカーテンの向こうに羽ばたく、でっかい怪鳥の姿が見える。なんじゃ、こりゃ？ こんな変な風景見たこと無い。

「マジでここは一体どこなんだ？」

つぶやくと、いつの間にか隣に立っていたイヨが答えた。

「ここは、邪馬台国ですわ。龍神様」

その言葉に俺は再び雄叫びをあげた。

「っえー……？」

解説しよう。邪馬台国とは3世紀頃日本にあった、女王卑弥呼が治めていたという国である。何と、あの三国志に出てくる魏ともおつき合いがあったようで、魏志倭人伝に登場したりするが、いまだに近畿にあったか九州にあったか分からないという、オカルト心を刺激する神秘の国である。

……ということは、歴史の話題になるたび「僕、日本史は全然駄目ですから」と笑ってごまかす俺でも知っている事実である。

その邪馬台国に、今、俺が居るって？

「ほ……本当ここは邪馬台国なのか？」

「ええ。間違いなくそうですわ。私が住んでいるのは都ではありませんけど」

「じゃあ、君、女王卑弥呼とか会ったことある？」

「ヒミコ……さま？ さあ。そんな女王様は知りませんわ」

と、イヨは首をふる。どうやら、まだ卑弥呼が現れる前の邪馬台国らしい。

「も……もう一つだけ聞いていい？」

「何ですか？」

「あの、黒い壁みたいなのは何？ あそこから向こう側は、ずっと日がさしてないみたいに真っ暗なんだけど」

「あそこは、冥界ですわ」

「冥界？」

「死と闇の王、ヨモツ大神が支配する国です。亡者や悪鬼の暮す恐ろしい場所で、普通の人間には近付くことはできません」

「そ…そんなものが、地上にあるの？」

教科書には載っていないが……。

「ええ、太古からありますわ。本当に怖い国なのです。あんな所、

イヨは絶対に行きたくありません」

そういうと、イヨはまるで憎むがごとく地の果ての闇を見つめた。俺も同じように闇の壁を見つめる。見事な程奇麗に光と闇とが別れている。日本史上にこんな世界があったなんて……。全く事實は小説より奇なりって本当だな。

「雨が、上がって来ましたね」

イヨが言う。

「本当だ……」

俺は空を見上げた。雲間から茜色の日がさしている。もう夕方らしい。そう言えば、腹が減った。

「村へ参りませんか？ みんなに龍神様を紹介したいですわ」

「うーん」

どうしようか迷ったが、せっかくだから古代の生活を見てみたいという好奇心を抑えられずついて行くことにする。何より、腹が減っていたし。

イヨの住む村は、洞窟から一本道をまっすぐ歩いていけば辿り着くらしい。「だから私でも道に迷うことがないんですよ」とイヨが説明してくれる。それから、イヨは村の話を色々してくれた。ヒガリイナキナカノクニヌシとかいう長い名前の村長の事や、自分を教えてくれるババ様ことシキコ様のこと。そのババ様が半年程旅に出ていて会わせられないのが残念だという事。そして自分と同じく巫女として神に仕えるモヨ様という女性がとてもしっかりしているので、自分は叱られてばかりだということなど……。その話のあいまをぬって俺はイヨにたずねる。

「ねえ。俺が鏡の中から出て来っていうのは本当？」

「ええ。本当ですわ」

イヨがうなづく。

「驚きましたわ。祈っていたら、突然鏡が光って、そこから白蛇みたいなものが現れて、消えたかと思ったたらすぐに龍神様が出て来ま

したんですのよ」

「でも、俺は鏡から人が現れるなんて信じられないだけだな……」

「人ではありません。龍神様です」

参った。この子は本気で俺のことを龍神だと思っているらしい。しかし、どうやら俺が元の世界に戻るための鍵は、あの鏡にあるようだ。鏡の中に人が入るなんて信じられないが、あんな闇のカーテンがあるような世界だ。何があったって不思議じゃないかもしれない。よし、明日、もう一度洞窟に行って、鏡に入れるかどうか試してみよう。

それから、10分程歩いただろうか。

「もうすぐ、村ですわ」

と、イヨが振り返り、自慢気に指をさす。みると、夕暮れの光の中煙りが立ちのぼっているのが見える。夕食を作っているらしき良い匂いもしてくる。

「もうすぐ、メシが食える……」

そう言って腹を撫でたその時。俺は本日3度めの雄叫びをあげる事になった。

「っえーっえーっえー？」

それは、森が深かったからでも、イヨの腰が意外に細かったからでもない。そこに、さっき山頂で見かけた怪鳥が、バサバサと飛んでいたからである。

「あの化け鳥はナガヨヤミタマクシヒチョウですわ！ 背中にヨミノシツルギフルカバネを乗せていますわ」

「はあ？」

長ったらしい名前過ぎで一度には覚えられないが、その怪鳥は、確かに背中にダースベーターみたいなのに乗せて居た。その、ダースベーターモドキが剣を振り上げこちらに襲いかかってくる。

「うっわー！ 化け物ー」

情けなく腰を抜かす俺の前にイヨが果敢に飛び出して言う。

「大丈夫ですわ！ 私におまかせください！ 私も巫女のはしくれですから！」

そういうと、イヨは腰に結わえ付けて居た袋を取り、

「えーと、こういう時は、破魔の矢……破魔の矢……」
と探しだした。

「って、今探して間に合うのかよ。っていうか、そんな袋に矢が入るのかよ」

そんな事言ってる間に怪鳥が目の前に迫ってくる。

「ぎゃー！ 殺されるー！」

悲鳴を上げながら、俺はイヨの手をひき森の中に逃げ込んだ。すると、怪鳥は木々に邪魔され寄って来れないのか悔しげにギャーッと一声鳴いた。ざまーみろ、鳥類め。人類の叡智を知れ！ と思っていたら、怪鳥の背に乗って居たダースベーターモドキがしゅたつと飛びおり、草を踏み分けてこちらに向かってくる。よく見ればダースベーターみたいに見えたのはシルエットだけだった。それは、青銅の兜と、鎧を身に纏ったミイラみたいな奴だった。

そのミイラが、穴ぼこみたいな目で俺を見下ろすと言った。

「ホデリの神様の呪いとき、雨を降らせたのはお前か？」

「は……はいー？」

何をこいつは言っているんだ？

「ホデリの神様の呪いとき、雨を降らせたのはお前か？」

「し……知りません。僕はただのしがな雨男です！」

「だまれ！ ホデリの神様の呪いとき、雨を降らせたのはお前だろう？」

そう言うと、ダースベーターモドキのミイラは剣を振り上げた。
「わー！ 寄るな、寄るなあ！ そんな目で俺を見るなあ！」

俺はパニックって、そこらにある石をめくら滅法投げ付けた。しかし、奴はよけようもしないで近付いてくる。もう駄目だ。お終いだ！

そう思った時だった。どこからか風を切るような音がして、次の瞬間、ダースベーターモドキはこなごなに碎け散った。碎けた残骸の中に一本の矢が突き刺さっている。

「？」

何があったのか、まったく把握できないでいると、茂みがガサガサ動いて一人の女が現れた。

「もよう様！」

イヨが叫んだ。

「もよ？」

俺は、もよと呼ばれた女をまじまじと見た。そして、おそらく、本日ラストとなるであろう雄叫びをあげた。

「っえー！ー！ー？」

それは、その女が古代日本人にあるまじきナイスボディだったからでも、たくしあげた袴の裾が色っぽかったからでもない。

「桃代おー！ー！ー！ー？」

そう。その女が『傘を持って歩くのが、超ウザイ』という理由で俺をふった、山下桃代に激似だったからである。

「桃代……なんでお前がここにいるんだ？」

俺は桃代に向かって叫んだ。

「ここは、古代で、邪馬台国なんだろう？……それなのに、なんでお前がここにいるんだ？　しかもそんな格好で……」

そこまで言って、俺ははっと気付いた。

「そうか……分ったぞ。やっぱりこれは嘘なんだな。お前達みんなでグルになって俺を騙そうとしてるんだろう？　新手のドッキリかなんかで……」

しかし、俺の言葉にイヨはきょとんとし、桃代はといえば心臓を貫くかのごとき鋭い瞳を俺を向ける。そして言った。

「イヨ？　なんなのよ、この、マヌケ面」

「マ：マヌケヅラあ？　お前、それが元カレに向かって言う事か？」

「しかも、なにわけ分かんない事言ってるのよ？　この馬の骨」

「馬の骨え？」

間違いない。この口の悪さ。桃代に違いない。

「おい！　桃代。お前は俺になんの恨みがあるんだ？　あんな手ひどいふり方をしたあげく、こんな大掛かりな嘘までついて」

「何よ。桃代、桃代って。私はモヨよ」

「あーもう。嘘はいいって。俺は知ってるんだから。お前のうなじには三つのホクロがあるだろう？」

そう言って、俺は桃代の髪をかきあげてうなじを露出させた。しかし……

「ない……ホクロがない」

つぶやく俺に、桃代がぱしっと平手を浴びせた。

「何すんのよ！　このハニワ野郎……！」

頬に激痛が走る。なんつー馬鹿力だこの娘。しかし、殴られた痛みよりも、ホクロがないという事実俺は打ちのめされていた。っ

てことは、この人は桃代に似た他人で、つまりやっぱりここは古代で……。

茫然自失の俺にかわり、イヨがつつと前に出る。

「ハニワではありませんわ、モヨ様。この方は龍神様ですわ」

「龍神様？　こいつが？」

「そうですわ。私、龍神様を呼び出す事に成功したんです」

「こんなマヌケ面が龍神様のわけないじゃない」

「いいえ。確かに龍神様ですわ。その証拠に雨が降りましたわ」

「……」

イヨの言葉に、モヨが一瞬ひるむ。

「お分かりでしょう？　モヨ様。私、龍神様を呼び出す事が出来たんです。生まれて始めてお祈りを成功させる事が出来たんですわ」

「祈りを成功させた……ねえ」

モヨが呆れたようにため息をついた。

「私に言わせればこんな奴が龍神のわけないし、さっきの雨だって偶然降っただけに決まってるし……よしんばこいつが龍神だったとしても、30日もかかってやっと呼び出すんじゃないのよ」

「……」

今度はイヨが言葉を詰まらせる番だった。

「あんたがいつまでも龍神様を呼び出せないために、この30日というものみなどうしてたと思う？　雨が全然降らないから作物は育たないし、動物だって乾きでどんどん死に絶えてくし……」

「……そうですね。雨乞いに30日もかけてるようじゃ意味ありませんわね。それで、この30日間村の人達はどうかやって凌いでいたのですか？」

「飲み水は、なんとか枯れずに残ってる井戸があるから、それを皆で分けて少しずつ飲むようにして、作物は、田畑にババ様の呪力のこもった水と土を捲いて、私が毎日祈りを捧げて、なんとか枯れないように守っていたの。でも、それだって、限度があるわ。稲も野菜もいつもの年より明らかに発育が悪くなってる」

「……でも、龍神様がいらして下さったからもう大丈夫ですわ」

「まだ言ってるの？ こいつが龍神のわけないじゃない。でも、もういいの。ババ様が明日戻って来るから」

その言葉にイヨが目を輝かせた。

「ババ様が戻ってくる？ 本当ですか？」

「本当よ。さっき知らせが届いたわ。ババ様がない時にこんな事になってしまったのは災難だったけど、ババ様さえいれば、きっとなんとかなる。ババ様ならきっと本物の龍神様を呼び出してくださいさるわ」

「……嬉しい」

「だからって、あんたの運命が変わったと思わない方がいいわよ」

運命？ なんだ？

俺は2人の少女を見比べる。氷のような顔をしたモヨと、今にも泣き出しそうなイヨ。なんだか、一触即発の雰囲気漂ってるように思える。

「それより、その偽者、とりあえず長様に会わせたら？ 一応それがしきたりなんだし」

言い捨てると、モヨはさっさと行ってしまった。後には涙目のイヨとマヌケ面の俺が残されている。

「なんだ？ あいつ。頭来るな」

腹立ちまぎれに俺が言うと、イヨが涙を拭いながら笑った。

「いいんです。モヨ様の言う通りなんですから。それより、モヨ様の言う通り、村長様に会いに行きましょう。早くしないと夕餉に間に合いませんわ」

それから、俺はイヨに連れられ村長に会いに行った。

高床式の館にでも案内されるかと思ったら、村のまん中の広場に案内された。

村長は、白髪頭を神話の神様みたいに両耳の所で結って、顔には入れ墨をし、首には深緑や橙色の勾玉の首飾りをぶら下げていた。

その、迫力たっぷりのじいさんが円座の中央に座り、杖を片手に睨み付けるように俺を見ている。その俺らを丸く取り囲むように、白い服を着た村人達が立っている。なんだか、今から尋問でも受けるみたいな気持ちになってくる。

「して、お前が龍神様の化身と言うのは、まことか？」

村長が厳かに言う。

「えーっと、あのう……」

口ごもる俺のかわりに、イヨが前に進みでる。

「そうですね。長様。この方は龍神様に間違いございませんわ」すると、俺達を取り囲んでいた村人の間から罵声が飛んだ。

「嘘つけ」

「助かりたい一心で、イヨが嘘をついてるんだ」

「助かりたい？ 一体どういう事だ？」

「っていうか、これ尋問みたいじゃなくて、尋問そのものなんじゃないか？」

これはエライところに来てしまったと後悔していると、

「嘘じゃ、ありませんわ！」

イヨがムキになって言った。

「この方は雷鳴の鏡から出て来られたし、何よりこの方が出て来られたおかげで50日ぶりの雨が降ったのが何よりの証拠ですわ」

「確かに雨は降った」

長のじいさんがうなずく。

「しかし、すぐにやんだ。ただの偶然かもしれない」

「偶然じゃありません！」

イヨが言う。

「さっきも言った通り、この方は雷鳴の鏡から出て来られました」
「それが嘘じゃないと、どうして言える？ 洞窟に居たのはお前一人。誰も見てないのではないか？」

「村長様の言う通りだ！」

村人達が声をあげた。

「助かりたいために、デタラメ言ってるだけなんじゃないのか？
この厄介者が」

どうも……。モヨを含めてこの村の連中はイヨに好意を持ってないみたいだ。なぜだろう？　こんなに可愛いのに。俺は気遣うように隣のイヨを見る。イヨは、唇を噛み締め、今にも泣きそうなのをこらえている。

「イヨ。その小僧が真実龍神の化身だと、どのようにして証をたてる」

村長が言う。

なんて連中だ。寄ってたかって、こんな小さな娘を、ここまで責める事ないじゃないか。頭に來た俺は、我知らず一步踏み出していた。そして叫んだ。

「長様」

「うん？　なんだ？　何か証を立てられるものがあるのか？」

「はい。実は俺とイヨは村の近くで化け物に襲われたんですが、その時その化け物が言いました『ホデリの神様の呪いをとき、雨を降らせたのはお前か？』と」

「なんじゃと？」

俺の言葉に村の連中が色めきたつ。村長も顔色を変えた。

「ホデリの神の呪いだと？　それは本当か？」

「ええ。本当です。なあ、モヨお前も聞いただろう？」

円陣の中にいるモヨに俺は尋ねてみる。あの距離で、モヨに聞こえたかどうか分らないが、あの化け物の声はけっこうでかかったから、聞こえたかもしれないと思ったんだ。いきなり、話しかけられてモヨは驚いたような顔をしていたが、しばらく考えた後、

「そういえば……そんな事を言ってた気もする」
とうなずいた。

モヨの言葉にさらに周囲がざわめいたが、構わず俺は言葉を続け

た。

「お聞きの通りです。つまり、あの雨が振ったのは偶然でもなんでもなくて、本来解けるはずのないホデリの神とかいう奴の呪いをイヨが破って降らせた雨だという事です」

これで、俺はイヨを庇ったつもりだった。けれど、この軽はずみな言葉が、俺の運命をさらに泥沼に導いていくとは知る由もなかった。

「なるほどな」

しばしの沈黙の後、村長がうなづく。

「と、いう事はやはりお前は、まことに龍神様の化身という事でいいんだな？」

「え？」

しまった！ この時はじめて俺は事の重要さに気付く。義侠心からられて、とんだ墓穴を掘ってしまったようだ。困惑しながら隣を見ると、イヨがさがるように俺を見ていた。信じ切った目だ。とても否定できない。追いつめられた俺は、ついにうなずいてしまった。

「そ……その通りです。俺は、確かに普通の人間と違ってよく雨を降らす事ができます」

なにしろ、究極の雨男ですから。と、心の中でつぶやく。

俺の言葉に、村長がトンっと杖をついた。そして言った。

「よし。今の言葉承認と受け取ったぞ。だが、お前も知っての通り、言葉の力は絶対だ。もし、嘘偽りがあれば、命をもってあがなってもらうぞ」

へ？ 命をもってあがなうってどういう意味？

きょんとんとしている俺を取り残して、村長は去って行く。その後ろ姿に向かって俺は声に出してつぶやいた。

「命をもってあがなうってどういう意味さ」

すると、どこから現れたのかモヨが言った。

「つまり、嘘だったら死んでもらうってことよ」

「へ？」

「あんたも神様の端くれなら知ってるでしょう？　言葉の力は絶大なのよ。まして、神様の名を使って語る言葉ならなおさら……」

「し……知らない」

俺は力なく首を振った。

その夜、俺はイヨに連れられイヨやモヨの住む祭殿に泊めてもらう事になった。屋根だけが地面にくっついたような竪穴式住居の間を通り過ぎ、しばらく行くと高床式の大きな建物が見えて来た。

「あれは祭殿ですわ」

と、イヨが教えてくれる。

それから、俺達は祭殿のそばにある竪穴式住居に入り、そこで夕飯を食べる事にした。どうやら、そこは巫女達の食堂みたいなものらしい。

「ありがたく思いなさいよ。ここは、本当ならあんたみたいな間抜け面の男が入れるような場所じゃないのよ。神聖なんだから」

貝や木の実を口に頬張りながら、モヨが憎まれ口をたたく。

「そうかよ。そりゃあ涙が出る程嬉しいね」

皮肉を込めて答えると、俺は赤色の米を口に入れた。古代米というやつだろうか？ 赤米というやつだろうか……少し固い。

「私達巫女は、東側の高床の家で眠るのです。でも、龍神様は神様ですから、祭殿にお泊まりになるとよろしいですわ」

イヨが果実を頬張りながら言った。

「あんたの横に泊めてやったら」

モヨが言う。

「それは、良い考えですわね」

とイヨ。

「何バカなこと言ってるんだ」

と、俺。

「冗談に決まってるでしょう」

とモヨ。

などなど、他愛の無い事を話していると、

「おい。そいつか？ イヨの連れて来た龍神様ってのは？」

と、一人の男が声をかけて来た。誰だ？と振り返ると、顔に赤色の入れ墨を入れ、鼻の下に鬚を生やしたガタイのいい男が立っていた。

「誰？ あんた？」

「俺は、カシヒ。巫女様に捧げるお食事を作る奴婢さ」

「奴婢？」

「奴隷の事だ。知らないのか？」

「奴隷？」

俺は男をまじまじと見た。奴隷？ そんなものがあるのか？

しかし……食事を作る事だけを仕事にしている割には迫力がある。顔の入れ墨のせいか、その筋の人みたいで正直怖い。

気持ち的に負けているのが伝わってか、男が小馬鹿にしたように言った。

「ふん……こんな小僧が龍神のわけがない」

「いいえ！ この方は龍神様ですわ」

イヨが言う。しかし、この娘、今日、何回このセリフ言っただろう？

「そりゃあ、そうじゃなきゃイヨは困るよな」

男が笑う。

「なにしろ、龍神様を呼びだせなければイヨは……」

男が何か言いかけた時、モヨが机を叩いた。

「誰が、私達に話しかけていいって言った？」

俺は驚いてモヨを見る。男も相当驚いたのか、

「モ……モヨ様。何を怒っておられるんですか？ みんなが言ってる事を言っただけですぜ……」

と、機嫌を取るように言った。うってかわった卑屈な態度だ。

しかし、モヨは取り合わない。

「ここから出て行け」

冷たく言い放つ。

「しかし……モヨ様」

「いいから出て行け！ さもないと神罰を下らせるわよ」

モヨのひとことで、男はみるみる青ざめた。なんだろう？ 迷信深い時代っぽいし『神罰』という言葉がよほど恐ろしいんだろうか？ と思っただら、どうやら大当たりだったよう

「神罰だけは勘弁してくれ」

と転がるように外に走り出て行った。

「おい、なんなんだよ？ あの高圧的な態度」

俺はモヨをたしなめた。

しかし、モヨは無言だ。

「おい、なんとか言えよ」

「……」

「どうして黙ってるんだよ？」

「……」

駄目だ。地蔵のごとくに無言だ。だんまり地蔵に向かって、イヨがおそろおそろ言う。

「モヨ様。ちゃんとお返事差し上げないと。龍神様がお気の毒ですわよ」

「……」

それでもやはり地蔵は口を開かない。俺とイヨは顔を見合わせタメ息をついた。しばらくすると、イヨが俺に小さな声で耳打ちする。「え？ ……でも、それって」ためらう俺に「いいから、用意！ 」と言うと「そーれ！」と言って、イヨがモヨをくすぐり出す。

「ちょ……なに……！ やめなさい」

「ほら、龍神様も」

「やめなさいってば、くすぐりたい。くすぐりたい！」

「早く、龍神様も」

「そ……そんな事言ったって。でもそこまで言うなら、ちょっと参加させてもらおうかな」

「って、いい加減にしなさい！」

ついに切れたモヨがイヨを思いきり突き飛ばす。すると、イヨはコロコロと床の上を一回転して「いったーい」と起き上がった。そして、

「モヨ様が、喋った、喋った」

と、はしゃぐ。

「まったく、あんたって子は」

「だって、モヨ様怖いんですもの」

「怖いって……誰のためにやな奴を演じたと……」

そう言うモヨは「あっ」と口を塞ぐ。

その仕種を見て、ピンと来る。

「なあ、モヨ」

俺は言った。

「俺、さっきからずっと思っていたんだけど、もしかしてイヨの身の上に、何か重大な事でもふりかかっているんじゃないのか？」

「な……なんで？」

モヨは明らかに動揺している。

「だって、さっき村の奴らが言ってたもん。『イヨが助かるために龍神を呼び出したって嘘をついてる』って。今のオヤジも同じような事を言ってた。だから、お前切れたんだろう？」

「関係ないわよ」

「でも、お前自身言ってたじゃないか。龍神を呼び出せたからって『運命が変わるわけじゃない』って」

「言ってるわい」

「言ったよなあ？」

俺はイヨに同意を求めた。

「はい。言いました」

イヨがうなづく。

「と、言うわけだよ、モヨちゃん。嘘ついてもいいのか？ 言葉の力は絶対なんだろう？」

からかうように言うと、モヨが顔を真っ赤にして怒った。

「うるさいわね。あれこれ詮索するんじゃないわよ！ このスケベやろう」

「スケベってなんだよ……」

「うるさい。エロオヤジ」

なんだか、わけの分からない応酬になって来たあたりでイヨが言った。

「もういいです。モヨ様。私から話します。別に隠す事じゃないし」

「……」

イヨの言葉にモヨはそっぽを向いた。勝手にすれば？ って感じだ。

「実は、私。この村の人間じゃないんです。子供の頃、市で売られてる所を、村長様に買われて来たんです」

「買われた？」

俺はちよつとばかりショックを受けた。

人身売買……この時代はどの国でも当たり前にあった事らしいけど……。

「じゃあ、君も、奴隷なの？」

「いいえ。私は、奴隷として買われたではありません。私がこの村に買われて来たのは、冥界の花嫁になるためです」

「花嫁？」

「ていの良い生贄よ」

「生贄？」

俺はさらにショックを受けた。

「そうです。生贄です。16になったら捧げられるはずでした」
あまりのショックに口をきけなくなる。が、しかし、やがて声を振り絞るようにして言った。

「そんな……そんな馬鹿な話あるか……」

「あるんだから、仕方がないじゃない」

モヨが冷たく言い放つ。

「けど、人を生贄に捧げるなんて」

「仕方がないでしょう？　そうしなければ生きていけないんだから。この村では10年に1度生贄を捧げる事で、冥界の呪いを鎮めて平和を保って来たのよ」

「だからって……」

「そりゃ、俺は21世紀の人間で、しかも日本人で。人を生贄になんかしなくても、誰もが平和にくらせて。食うに困る事もなくて。それだからこそのお気楽な発想かもしれないが、人を生贄に捧げるなんて理解できない。」

「生贄は16才までの乙女と決められています。そして、最後の生贄を捧げてから今年で10年目……」

「イヨが淡々と言う。」

「10年目？」

「そう。でも、この子はまだ村にいる」

「どうして？」

「生贄にするのはやめたからよ」

「へ？」

「俺は少し拍子抜けした。」

「そうなの？」

「ええ。一応はそれはずでした。ババ様がそうおっしゃってくれたから」

「イヨがうなずく。」

「私がこの村に買われて来手からすぐに、ババ様が占いをして下さったんです。その時『イヨには他の村人にはない才能がある。いずれ冥界を滅ぼして救ってくれる子だから、生贄なんかにしちゃいけない。それよりは巫女として大事に育て、いつか目覚める時を待て』っておっしゃってくれたんです。それでこの祭殿に引き取られて、モヨ様とともに巫女として育てられたんです。ところが……」

「そう言うと、イヨは黙りこくってしまった。かわりにモヨが続けた。」

「ところがね、ある日冥界の王が使者を送って来て、次の生贄には、ぜひイヨを寄越せと指名して来たの」

「なんで？」

「分からないわ。どこかで会って目をつけられたのかも。冥王って幼女好きって聞くし。こいつの童顔が好みだったのかもね」

「ロ……ロリコンかよ。つか、生贄って何するんだよ？」

「変な想像するんじゃないわよ。とにかく、冥王直々の名指しじゃ、誰も断れないわ。やっぱりイヨを生贄にしろって声がみんなの間で高まって……」

「でも、ババ様だけはイヨを庇ってくれたんです。絶対にこの子を生贄にしちゃいけないって」

「そうなのよね。なんで、ババ様はここまでイヨを大事にするんだか。こいつときたら、巫女としては全然落ちこぼれで、雨乞いはできない。病人に憑いてる霊は追い出せない。弓も駄目。祝詞も覚えない。占いも無理。あんまりの役立たずぶりに、村のみんなあきれ返って、これはもしかして珍しくババさまが占いそこねたんだって噂してるの。もし占いが間違いだしたら、このままずっとイヨを村に置いておいたらまずい事になるって」

「それでも、ババ様だけはイヨを庇ってくださいって……」

と、イヨが言う。

「そう。それでババ様は、冥界の王が咽から手が出る程欲しがっているものを探して来るって、それとひきかえにイヨの事はあきらめてもらうって、3カ月前に村を出て行ったの。その間にも冥王からの催促は矢のように来るし。そのうち、日照りが起きて作物が育たなくなっ、とうとう一部の心無い連中が『今のうちにイヨを冥界にやってしまえ』』と思いついたの。それで、村長様にイヨの役立たずぶりを延々と語って、村を犠牲にしてまでおいとくような娘かって迫ったんですって。それで、村長様も困ってしまったの。なにしろ、ババ様との約束があるし、だからといって村人の運命もかかっているし。それで、村長様はイヨの運命を天に預ける事にした

の。もし、役立たずのイヨが雨乞いに成功したら、ババの言う通り村を救う娘にちがいない。しかし、もし、雨乞いに失敗したら、ババの占いは外れたものとしてイヨには冥界にいつてもらおうと……」

「なるほど。そういう事だったのか」と、俺はうなずいた。

「でも、俺……つまり龍神様が現れたんだから、イヨの冥界行きは無しだな。これにて一件落着って」

俺が遠山の金さんのごとくまとめようとした時、

「そう、簡単に、済むかしら？」

モヨが首をかしげた。

「なんでさ？」

「だって、さっきあんた言ったじゃない。ホデリの神の呪いとかなんとか」

「ああ。あのダースペーダーモドキの事？」

「ヨミノシツルギフルカバネですわ」

「あれって、いよいよ冥王が本気になったって事よ」

「ああ。そうか……」

おれはうなずく。

「大丈夫ですわ」

イヨが言う。

「龍神様が居ますもの。イヨは信じてます。龍神様ならイヨをこの運命から救い出して下さるって……」

いや、それは無理だと思うよ。と、俺は心の中で答えた。俺はただの人間だから……。

その夜。俺は広い祭殿で一人眠る事になった。『居心地がいい場所ですよ』なんてイヨは言っていたが、広いは、暗いわでなんとなく怖い。古代の闇はハンパない暗さと、深さを併せ持つてる感じがする。まるで、すぐそばに異形の物でもいるような……。

眠れないまま夜具の中で今日一日の事を思い返して居た。なんで、こんな事になったんだろう？ 俺はちゃんと元の世界に帰れるんだろうか？ などなど……。考えていると、突然、さらさらと絹ずれの音がして、誰かが近付いてくる気配がした。

さらさらさら……

なんだ？

薄気味悪くなる。

まさか……お化け？ それとも、昼間の化け物？

断わっておく。俺は霊なんか信じていない。少なくとも21世紀の文明に守られている限りは。

しかし、これだけ異常な目にあってしまっただけは、お化けも妖怪も否定できない。なにより、この古代の世界には、何が起きるか分からない底知れない恐ろしさがある。俺は夜具をかぶってがたがたと震えだした。そして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお経を唱えると、何か生温かいものが夜具の上から俺に触れた。

「わっ」

飛び上がると、そこにイヨが居た。

「な……なんだ？ イヨか」

激しく波打つ鼓動を抑えながら俺はイヨを見る。

「ごめんなさい。起きてしまわれたのですね」

「い……いいよ。まだ、寝てなかったし……。それより、何しに来たの？ 君はモヨと巫女の館で寝ていたんじゃないの？」

「ええ。ですけど、今日は龍神様と一緒に寝ようと思って」

「……はい？」

「ですから、ここで、一緒に寝ようと思って」

「はあ？」

言うや否や、イヨが夜具の中に入り込んで来た。腕に柔らかい感触が……。

「って、ええー！ 駄目でしょ？ 駄目だって」

「どうしてですか？」

「どうしてじゃないだろう？ 仮にも妙齡の女性が男の布団に潜るなんて」

「でも、こうすれば冥界の花嫁にならずに済むかもってモヨ様が」

「はあ？」

「龍神様と一夜をともにすれば、もう乙女ではないからと」

「……」

「そのかわり、巫女としても終わるけどって。でもいいんです。私、巫女の地位には未練ないですから。全然才能ないし。」

「……………」

あの女ー！

俺はモヨの実に意地の悪そうな目つきを思い出し齒がみした。

一度殴ってやるー！

返り打ちにあうのは必定だが。

そうこうしてる間に既にイヨは眠ってしまった。この娘、何も分かってないし。

寝息を立ててるイヨを横目に、俺はそつと夜具から抜け出し、部屋の隅で膝を抱えて寝転がり目をつぶった。しかし……だめだ。とても眠れない。つーか、やってられるかー！

心の中で雄叫びをあげると、俺はすやすやと眠っているイヨを起

こさないようにそつと部屋から出て行った。外に出ると、既に夜は白み始めていた。紙もペンもないから、小石を拾って土の上にメッセージを残す。

イヨとモヨへ

世話になったけど、俺は出て行きます。

もう、2度と会う事もないだろうけど元気だな。

イヨとモヨが力を合わせれば

なにもかもうまく行くよ。

それじゃあ

龍神こと、究極の雨男 青空太陽

それから、俺は忍び足で歩き始めた。今だ眠りの中にいる村人達を起こさないよう、そつと、そつと。そして、村を出てまっすぐ東へ歩いて行った。目的地は言うまでもなく、昨日の洞窟だ。一本道だから迷う事もないだろう。唯一怖いのは、昨日みたいな化け物に会う事だ。が、幸い、何にも会わず、無事に洞窟に辿り着く事ができた。

洞窟につくと、ひとまずホッとして腰を降ろす。そしてつぶやいた。

「ごめんな、イヨ。俺は、元居た時代に帰るよ。俺は未来人なんだ。しかも、超不真面目、テキトーに生きてる21世紀の日本人なんだ。だからさ、嘘をつくだけで殺されたりとか、16才の少女を生贄にするとか、そんなヘビーな話しにはついていけそうもないよ」

そこまで口にした時、俺は今朝一番の雄叫びを上げた。

「へ……へびー……!!!!!!」

そう。そこには体調2メートル程もあるでかい白蛇がとぐろを巻いて俺を見て居た。これが、夢なら最高のラッキードリーム。金運アップ間違いなしで、是非ともこのチャンスに宝くじを買いに行こう！ と言いたところだが、残念ながら、これは夢ではない。と

いうか、この異常な世界が夢ではない事の方がむしろ異常なんだが、まったく遺憾ながらこれは現実なのである。あまりのキョーフに、俺は洞窟の中にダッシュした。そして、あろうことか鏡に向かつてダイブした。なぜなら、昨日、イヨが、その『人の頭大の鏡』から俺が出て来って言ってたからだ。出て来られたのなら、入れるはずだ――！ との単純計算によるものである。が、しかし。

ゴ
チ
ツ

という音とともに、デコにものすごい激痛が走り、そのまま顔面から地面に衝突した。そりゃそうだ。入れるわけねーじゃん、鏡なんか。信じた俺も馬鹿だった。たった一つのラッキーは、振り返ればすぐそこまで来ていたはずの蛇の姿が消えていた事だ。一難は去った。だがしかし、それならそれで、どうやって21世紀に帰ろう？ 考える事数十秒。名案を思いつく。ものすごく確立は低いが、もしかしたらこの世界に、ノ○太とともに映画の撮影に来てるかも知れないドラ○もんを探して、タイムマシンに乗せてもらおうか、って、いるわけないだろ、そんなもん。と、虚しく一人乗り突っ込みしてから、もう一度、こうなるにいたった経緯を思い返してみる事にした。

そう。昨日は雨が降っていて、俺は、脱雨男するために神社へと向かった。そこで、安倍野キョアキという名の神主がお祓いをしてくれた。しかし、お祓いは成功せず、かわりに安倍野青年は言った。「あなたには、とんでもないものが憑いている……り……り……りー」

「――」

そうだ。俺には何かタチの悪いものが憑いているらしい。そいつのせいで、こんな目にあっているのかも知れない。そのヒントは、あの神主の言った「り…」とう言葉に隠されているはずだ。

「り
…
り
…
り
…」

俺は、とりあえず思いつく限りの『り』のつく名前を上げてみる

事にした。

「ジェット・リー。ブルース・リー。劉備玄德」

なんか、中国人っぽい名前ばっかだな。最後のがよく分からんし。

「リンド。リリー。リア。リエ。リコ」

次は女の子の名前ばっかになってしまふ。

と、その時。上方より突然声が聞こえた。

「もしかして、お前って馬鹿だろう？」

「誰だ？ 俺の人生にかつて使われた事のない2文字を使う奴は」

と答えつつ見上げると、そこに一人の子供が居た。おかつぱ頭で、水色の着た……

「あー！ お前はー！ー！」

思わず本日2度目の雄叫びを上げる。

「竹千代ー！ー！」

「誰が、竹千代だ！」

子供が突っ込みをかましてくる。

そう……そいつは、あの日、お祓いが終わった後に境内で出会った奇妙な子供だった。千と千尋の神隠しに出て来たハクみたいな髪型をして、青い着物を着ている姿があまりにも竹千代っぽかったのだ、俺の心の中でやつの名前は、すっかり竹千代で定着していた。というか、そんな事より、そういえば、俺、こいつを追いかけてるうちに気を失ってここにきたんだっけ？

竹千代（仮名）は言う。

「普通、このシチュエーションで『り』のつく奴に取り憑かれてるって言われたら、すぐにピンとくると思うんだけど……」

「そうかもしれない。しかし、俺にはさっぱり分からないんだよ。

竹千代」

そう言うと、俺は肩をすくめた。

「さりげに竹千代って呼ぶなよ」

「じゃあ、お前の名前は一体なんなんだよ」

「僕？ 僕の名前はお前の不自由な頭で覚えるには少し長いから、そうだね。とりあえず略してriverとでも呼んでもらおうか」
「って、なんでそこだけ英語なんだよ？ しかも発音超正確だし」
「僕は、英語からラテン語、アラム後にスワヒリ語まで、万国語が話せるんだ」

「そういう問題じゃないだろう。……ってというか、リバー？ あっ
あー！」

俺はものすごい発見に興奮し、再び雄叫びを上げた。

「そうか。分ったぞ。俺についてる『り』のつく奴ってお前の事かい！ 竹千代ー！」

「とりあえず正解だけど、やっぱり馬鹿と呼ばせてもらおう。お前に取り付いている僕の正体は龍神。『り』ユウジンだよ。分ったか？」

「あ！」

俺はワナワナと身を震わせながらつぶやいた。

「な……なんという、大どんでん返しだ！？」

「って、フツー、もっと前に気付くだろう」

竹千代（仮名）がするどい突っ込みを入れてきた。

「お前がリバーという名前の龍神で、俺に取り憑いているというのは分ったよ。竹千代」

俺はおかっぱ頭の子供に言った。

「分ったんならリバーと呼べ」

竹千代（仮名）怒る。

「しかし、まだ分からない事が2つある」

「なんだよ？」

「まず、なんで俺が龍神にとりつかれなくてはならないのか？ という事。もう一つは、なんでこんな世界に飛ばされたのか？ という事。補足の質問として、どうやったら元の世界に帰れるかという事」

「なんだ。そんな事か」

竹千代（仮名）はこともなげに言う「いいだろう。教えてやるとやけに偉そうに言った。」

「まず、なぜ僕がお前にとりついているかの件について。それは、お前の魂に宿る宝玉の力に引きよせられるから」

「何？」

なんか、またとてつもない話しが飛び出して来た。

「魂に宿る宝玉の力？」

「そうだ。宝玉『シオミチノ珠』の力がお前の魂には宿っている」

「しおみち？」

また、なんかよく分からない言語が飛び出して来た。

「なんだ？ そりゃ？」

「海の満ち引きや、海流を操る事のできる宝玉さ。その昔海神の国にあったんだが、いろいろな事情があって山幸彦って奴の手に渡った。ところが、この時代を基準にして1000年程前、その宝玉を飲み込んだ男がいる」

「珠を飲み込む？　なんでそんな事を？」

「そうすれば、珠の力が得られると信じたんだそうだ」

「間抜けな奴だな」

「お前の何個か前の前世だ」

「……俺は前世とか、スピリチュアルとか、オカルトとかは信じない。したがって、そんなマヌケが自分の前世だという事も信じない」

「信じようが、信じまいが、事実だから仕方ない。そして、その飲み込んだ珠の力が、なんとお前の魂の中に溶け込んでしまった。その宝玉のエネルギーが、俺ら水を司る神族をひきつけるんだ」

「……………」

「お前が、海のそばに住んでなくてよかったよ。もし海辺に住んでいたら、もっといろんな神にとりつかれていただろう」

「お前がとりついている理由は分った。次の質問にうつろう。どうして、俺はこんな世界に飛ばされなくちゃいけなかったんだ？」

「それは、お前が僕を追い払おうとしたからだ」

「そんな理由で、こんなヒドイ目に合わすのか？　別れを切り出された未練がましい女じゃあるまいし」

「別に、わざとここに連れて来たわけじゃない。お前に喧嘩を売られて、ちよっぴりムキになってしまった僕が、よせばいいのに人の姿でお前の前に現れてしまい、その僕を君が大人げなく追跡して来ただろう？　あの時、僕も少し必死になり過ぎた。元にいる神界に戻るつもりが、慌て過ぎて中途半端に異次元に飛び込んだために、おかしな力に巻き込まれてこんなところに出てしまったんだよ」

「なるほどね。それで、帰る事はもちろんできるんだよね？」

「無理だね」

「……はい？」

「無理」

竹千代（仮名）は非常にあっさりと答える。

「無理って事はないだろう？　来た事ができるんだから、帰る事も

できるだろう？」

「いや。マジで無理」

「どうしてだよ」

「それは、歴史に異物が混入したからさ」

「異物？ 異物ってなんだよ？」

「お前だよ」

「人をギョーザに入った糸クズみたいに言うなよ」

「異物は異物だから仕方ないだろう？」

「もし、タイムパラドックス的な事いつてるなら、俺はほぼ何の影響も与えてないと思うぞ。そういう事にならないように、あえて早めに引き上げてきたんだからさ」

「ふっ……果たしてそうかな？」

「違うっていうのか？」

「まあね。そうとも言えるね」

「なんだよ？ その含みのある言い方。ちゃんと説明しろよ」

「いいよ。しかたないから教えてやろう。今、お前が古代と呼ぶこの時間の上では神と魔が戦っている」

「……のようだな」

俺は、洞窟の中からでも見る事ができる異様な風景。空間を切り分けるようなあの黒い闇のカーテンの向こうを眺めながらうなずいた。

「この世界は、まだ神話の時代にいて、大地も空間も固まりきっていない。だから、あんな、光と闇がくつきりと別れたような奇妙な風景が地上に現れたりする。神と魔の戦いは長く続くが、お前が居た時間から見た過去では、とりあえず……あくまでも表面的にだが……光が勝利して、闇は地下に潜る事になる。お前達人間が、自分達の普段の行いの是非はともかく、心の底では正しく生きた方が良いという考えを持ったり、正しい事を子供に伝えたりするのはそのためだ」

「建て前とか、道徳とかいうやつの事か」

「そうだ。そういうものがなければ、世界は完全に地獄になる。ところが、お前という異物がこの世界に混入した事で、時間と空間のバランスが崩れた。お前は、この世界を織り成すタペストリーに混入した異物なんだ」

「光と闇の戦いと俺の存在は、今のところ何の関係もないだろう？俺はどっちの味方もしないし、誰も殺してないし。今のうちに帰っちまえば全部チャラだよ」

「けど、お前はイヨと出会ってしまった」

「イヨだって、すぐに俺の事なんか忘れるよ」

言ってしまったから、何故かひどく凹む。すると、竹千代（仮名）は首を振った。

「そうだったら、いいんだが……」

「どういう事だよ。もしかして、イヨは俺を忘れないって事か？」

「嬉しそうに言うなよ。事は重大なんだ。いいか？ここに来てから僕なりに本来の歴史の流れについて調べてみたんだが、それによれば、本来の時の流れの中では、イヨは結局龍神を呼び出す事ができず、冥界の花嫁として闇の国に送られてしまったんだ。イヨは人生に絶望し、せめて冥界の王に一太刀でも浴びせようとして、それを実行する。小娘とあなどっていたのがいけなかった。冥王は心臓を貫かれるんだ。もちろん、その程度で死にはしないが……。そして、イヨは自分の剣が冥王の胸を貫いたのを見ると、すぐに毒を飲んで死んでしまった。冥王は一命はとりとめたものの、その時の傷が原因で徐々に力を失っていく。つまり、イヨの存在………というかイヨの死が世界に光をもたらす大きな鍵になっていたんだ」

「……」

あまりのショックに口をきけなくなる。しかし、そういえばババ様（面識はなかったが）が言っていたらしいな。「イヨはいつか、私達を救ってくれる子だから」とかなんとか。まさか、それが、そういう意味だったなんて……。

「ところが、お前が現れた事で、雨が降った。これで、彼女はもう

冥界に行かずに住む」

「そうなのか？」

「多分ね。はっきりと決まったわけじゃないけど」

「そうか」

……と、胸をなでおろす。

「おい、喜んでる場合じゃないだろう？　それがどういう事を意味するか分かるか？　彼女が冥界に行かなければ、冥王の胸を貫く事もない。ということは、世界は光に覆われる事もない。世界は変化する、未来は不確定になった。もうお前は、元いた未来には帰れない」

「そ……そんな。でも、俺は人間であって龍神じゃない。つまり彼女は龍神を呼び出してないし……」

「だったら、お前、今から村長の所にいって『実は僕は龍神じゃないんです』って言って来いよ」

「できるわけ無いだろう。殺される」

殺されなくたって、できない。

「とにかく、お前の出現で、イヨは自信をつけてしまった。あの娘は、彼女があのか村に来て以来与えられ続けた負の暗示のせいで、今までまったく自分の力を発揮する事ができなかったのに、お前との出会いで変わってしまったんだ。」

「負の暗示？」

「そうだ。イヨはあの村では他所者な上に、見かけも日本人離れしてるだろう？」

「確かに、目は大きいし、髪の色は薄くてウェーブがかかっている。」

「日本人離れした美形だな」

「21世紀ならね。でも、この時代では、そういう外見はものすごく不利になるんだ。だから、イヨはずっと虐められて来た。そして、あまり虐められ過ぎたものだから、自分で自分をいじめるようになってしまった。つまり、自分にマイナスイメージを与え続けてしまったって事だけど。それがイヨの持つ本当の力を押さえ込んでいるんだ。そのかわり、イヨは死ぬ事を怖れていなかった。この世界に

未練がないんだろうな。だから、冥王にひと太刀浴びせるなんて無茶ができたんだろう。でも、お前に会った事で、イヨはこの世界に希望の光を見い出してしまった。もう、自殺する事はないだろう」

「俺が、イヨにそんなに影響力を持つのかな？」

「分かってないな。イヨにとって、お前の出現は、生まれて始めて叶った願いなんだぞ」

「……」

何だか、ひどくショックだった。そんな風に……俺の存在をそこまで思ってるのか？ あの子は……。それを見捨てようとするなんて……そういう自分に一番嫌気がさす。

「じゃあ、もし俺がここで居なくなったら、彼女は絶望して死んでしまうのかな？」

「それはないだろう。彼女は『生きていれば光がさす事がある』という事を知ってしまったから。だから、万が一この先冥王に囚われても、もう死ぬ事はないさ。そして、いつまでも待つだろう。君があらわれる事をさ。もっとも、その前に冥界に馴染んじやうかもしれないけど」

そう言ってケタケタ笑うと、龍神のガキは青白い稲妻とともに姿を消した。

そのとたん、ゴゴーンと音がして、空間が揺らいだ。同時に、周りの風景がテレビでノイズが走ってるみたいになり、次には世界全体が様々な色をとまなつてぐにゃぐにゃと渦巻きはじめる。

「な……なんだ？」

おどろいて、目を閉じる。

そして、次に目を開いた時には何もかも元に戻っていた。

「今のも、お前の仕業か？」

俺は姿の見えない龍神に向かって叫んだ。するとどこからかケタケタと声が聞こえる。

「違うよ。今のは空間のバランスが崩れた印だよ。闇の力がますます強くなったみたいだね。早くしないと、間に合わないよ」

その言葉が終わると同時に先程見た白蛇が現れて、俺に向かって舌を出し、どこへともなく消えて行った。

龍神のガキと別れた俺は、なすすべもなく洞窟の外に出た。

21世紀に帰れないという。

その事実が恐ろしく胸に迫ってくる。

別に今までそんなにたいした生活を送っていたわけじゃない。けど、ジョージアのCMに出ていた宇宙人のオッサンの言葉をかりるなら、俺は、あの『ロクでもない素晴らしい世界』をそれなりに愛していたらしい。

思い出すだけで涙が出てくる。雨の中の運動会、雨天決行の登山。そして、雨に濡れたデイズニールランド……って、別な意味で悲しくなるわ。

と、一人でノリ突っ込みしたあたりで、聞き覚えのある声に呼ばれた。

「ちょっと、あんた。何してるのよこんなところで！」

この無駄にトゲのある話し方……モヨだ。

「何してるのって……」

俺はモヨを見て言った。

「俺の残したメッセージ読んでないの？」

「メッセージ？ なにそれ？」

「砂の上に書いておいただろう？」

「砂の上？ そんなの見てないわよ。それより、早く来て！ イヨが大変な事になってるの」

「イヨが？」

「そうよ。早く」

モヨにせかされ、もと来た道を村に向かって走って行く。しかし、村に辿り着くより先に、俺らはイヨとはち合わせる事になった。数

人の大男がイヨを引きずり、こちらに向かって来たのだ。

「やめて下さい！ やめて下さい！」

イヨが泣き叫んでる。

「おい！ 何してるんだ？」

俺は男達の元に駆け寄った。男達は、俺とモヨを見ると気まずそうな顔をする。

「何してるんだ？ 言えよ」

俺の問いかけに、

「イヨを、無理矢理冥界に連れて行こうとしてるのよ」

モヨが答えた。

「なんだった？」

視線を落とすと、引きずられたために砂まみれになったイヨが怯えてる。手や足のあちこちにできた引っ掻き傷から血が溢れだしてる。

「約束が違うじゃないか」

俺は村人達に食ってかかった。後ろ暗さのためか村人達は視線を逸らす。

「これは、仕方ない事だ」

一人の男が答えた。

「さっき、冥界から使者がきた。今日中にイヨを寄越さなければ、恐ろしい災いを下すと」

「なんだった？ 本当か？ モヨ」

「本当よ。昨日言ったでしょう？ このままホデリの神が黙ってるはずない。イヨを手に入れるために、絶対に何かしかけて来るって……」

「けど……村長は同意してるのか？」

「いいや。オサ様はババを待てと言ってる。ババに言えばとめるに決まってる。けど、俺達はもう待てない。見ろ。この田畑の有り様を」

いわれて、あたりを見回す。すると、そこには既に立ち枯れかけ

ている稲田が広がっていた。土はカラカラに乾き、ひびが入っている。昨日見た時は、少ないながらも水があったのに。

「どうしてだ？ モヨの術で作物が枯れるのだけは止めてたんじゃないのか？」

「ホデリの神が呪力を強力にしたらしいの。それだけじゃない。闇の力が増してる」

そう言うのと、モヨは彼方に広がる暗黒の壁を見つめた。それは、ゆっくりと、だが確実にこちらに向かって広がってきている。

「このままじゃ、闇にのまれる。もう、私一人の力ではどうにもならない……」

らしくもない弱音をモヨが吐いた。

「なんて事だ……」

俺は言葉を失った。俺とイヨが出会った事で世界のバランスが崩れたという。その結果がこれか……。と、その時、

「そうだ。お前が雨を降らせればいい」

一人の村人が俺を指さして言った。

「お前が本当に龍神なら雨を呼べるだろう？」

俺は青ざめる。最悪な展開になってきた。

「雨さえ降れば、稲は枯れずにすむ。降らせてくれ、雨を」

「そうだ。降らせろ雨を！」

「降らせろ！」

「今すぐ！」

叫び声が、どんどん大きくなる。

「龍神様」

イヨがさがるように俺を見た。そんな目で見られたって、俺には何もできない。助けを求めるようにモヨを見る。しかし、モヨは俺の視線に気付くと、そっぽを向いた。俺達がどうなってもいいと思ってるのか？

いつまでたっても微動だにしない俺に、村人達も不信感を抱きはじめてたのか、

「どうした、龍神？」

「どうしてなにもしない？」

「やっぱり、お前、偽者か？」

などと口々に騒ぎ出した。

ああ。もう。偽者だと言ってしまいたい。けど、そんな事したら殺されるし、第一イヨが……冥界に行かされてしまう。だめだ。そんな事はさせられない。

「ぶ……無礼者が」

俺はヤケクソになって叫んだ。

「俺は、本物の龍神だ」

その言葉にモヨが驚き、イヨは嬉しそうな顔をする。

「だったら、本物の龍神のあかしを見せろ！」

村人達が言う。

「うるせえよ。そんなに見たきゃ、見せてやるよ！」

答えると、俺はやけくそになって田んぼの中に入っていった。勝算があったわけじゃない。しかし、あの龍神のガキは、姿こそ見えないまでも今も俺にとりついてるはずだ。

「おい！ 聞こえるか？ 竹千代！ いやさ、リバー」

返事はない。が、構わず言葉を続ける

「見ての通り、いたいけな少年と少女のピンチだ。出て来い！ そして、いつもみたいに無駄に雨を降らせろ！」

やはり、返事はない……あのガキがすなりと力を貸すとは思わなかったが……しかし、人ひとり。いや、ふたりの命がかかってるんだぞ？ 情ってもんが無いのか？ お前は。いやしくも『神』のくせに。

すると、頭の中で声がした。

『情なんて、あるわけ無いだろう？ 龍神に』

ぎょっとして、あたりを見回す。しかし、奴の姿は見当たらない。

『探しても無駄だよ。見えないところにいるから』

お前、俺の心が読めるのか？

『あつたり前だろう？ 心を読むぐらいのこと、卑しくも神の眷属なら誰でもできるさ。で、お前、微妙に勘違いしてるようだけど、全ての神が情け深くて慈愛に満ちているわけじゃないからな。むしろ、俺は怒りの神だ』

じゃあ、手はかさないって事か？

『ただでは貸せないね』

ちっ。結局金かよ？ で、いくら欲しいんだ？

『アホか。人間の汚い金なんて誰がいるか。俺の欲しいのはもっと別なものだ』

なにが欲しいんだよ？

『今のお前には言っても無駄だよ』

じゃあ、俺とイヨに死ねっていうのか？

『それでも構わないけど』

俺が死ぬより先にお前を殺してやる。

『怒るなよ。冗談に決まってるだろう？ それどころか、この場を

丸く治めて、お前が元の世界に戻る手っ取り早い方法を教えてやる』

そんな方法があるのか？

『あるさ。簡単な方法だ。今すぐ、イヨを見捨てて逃げればいい』

はあ？

『そうすれば、あの娘はお前が龍神で無い事を悟り、おまけにとんでもない卑怯者だという事も理解する。そうすれば、全てが正道に戻る』

言ってる意味が分からないな。

『分からないか？ さっき言ったように、お前に対する幻想が、あの娘の生きる希望になってしまっているんだ。だから、もし、あの娘がお前に対して失望すれば、きっと元の歴史通り、冥王を倒すために喜んで命を差し出すだろう。こうして光は勝利し。お前も元の世界に帰れる。これで、世界もお前も万々歳だ』

おい、二度と俺に向かってそんな汚いセリフを吐くなよ。

『何言ってるんだよ。せっかく良い方法を教えてやったのに』

もういい。消えろよ、この邪神野郎。

『いいのかよ。俺を追い返したら、雨は降らないぞ？』

やかましい。消えろ！ 誰がお前の力なんか借りるか！

『聞いたぞ、その言葉。俺は、もう知らないからな』

龍神の言葉が終わると同時に、足元から小さな白蛇がはって行くのが見えた。

「見つけたぞ！ この龍神やろう！」

捕まえようと腰を曲げたその時、

「おい、お前、何さつきから、一人でぶつくさ言ってる？」

ごつい手に腕を捕まえられる。振り返ると、ヒゲヅラの男が険しい目で俺を睨んでいた。

「結局、雨は降らせられないのか？」

鬚面の男が俺の目を覗き込んで言う。返答に窮していると

「降らせられないんだな？」

と、にやりと笑う。

「答えは決まった。この小僧を、村長様のところに連れて行け。イヨも一緒にだ。これで、堂々と、イヨを冥界に連れて行くことができる」

こうして、俺はイヨとともに、昨日尋問を受けた広場の中央へと再び連れて行かれた。

「話はすべてそのサカマキから聞いた」

白髪頭の村長が言う。その手前で髭面の男が下卑た笑いを浮かべている。あれは、イヨを冥界に行かせたがっていた男だ。

「お前はやはり龍神ではなかったのだな？」

広場のまん中で後ろ手に縛られ、俺は頭を垂れた。

「昨日も言った通り、言葉の力は絶対だ」

情け容赦のない村長の言葉が俺を打つ。

「それを違えた者は命をもってあがなってもらう」

死刑宣告が下された。

俺はぎゅっと目を閉じる。夢であってくれればいいと思う。しかし、これは夢ではない。その事は、昨日ここに来た時から何度も確認し痛感させられている。もはや、何もかも終わりだ。こんな変なところでこんな風に死ぬなんて、つい数日前まで思いもしなかった。あの平凡な日々が果てしなく続くのだと信じていた。

死にたくない。

生まれて始めて痛烈に思った。

けど、今の俺に何ができるっていうだろう？ 平和な世界でだら

だらと過ごして来た俺は、武力ゼロ、体力ゼロ、瞬発力ゼロ。とてもじゃないが目の前に立つ屈強な兵士を倒して逃げるなんてできるわけがない。兵士だけじゃない。周りを取り囲んでいる村の連中にしたって、俺なんかとは比べ物にならない程鍛え上げられた体をしている。もう観念するしかない。そう思った時、俺と同じように後ろ手に縛られ、俺の横に座らされていたイヨが叫んだ。

「オサさま。どうか、この方を殺さないで下さい」

すると、村長がその冷徹な眼をイヨに向けた。イヨは恥も外聞もなく哀願した。

「この方は、本当に龍神様なんです！ イヨは知っています。本当に龍神様なのです！ 信じて下さい」

この子は、まだそんな事を？ あれだけの事を見ても、まだ俺を龍神とおもいたがるか？ そこまで、俺を信じてくれるのはありがたいけど、悪いけどこの時ばかりは少しイラッとした。

周りからは罵声が飛んだ。

「まだ、そんな事言ってるか。イヨ」

「いい加減にしろ」

「そうまでして、助かりたいか？」

正直言って、村の連中と同意見だ。現実逃避も大概にしろよと。

「違います！」

イヨが言う。

「私の事は……私の運命については、もうあきらめています。私は、いつでも冥界に行きます。けど、この方には元々なんの関係も事で

す。『この人』は不運にも私の運命に巻き込まれただけです。どうか、『この人』を殺すのだけはやめて下さい」

その言葉で、俺は気付いた。……違う。この子だって、俺が龍神でもなんでもない事ぐらい、とっくに分ってるんだ。ただ俺を庇おうとして、この後に及んで見え透いた嘘を言い続けているだけなんだ……命がけの嘘を。それに気付いた時、例え一瞬でもイヨを馬鹿にしてしまった自分を俺は恥じた。それで、言わずにおられなかった。

「イヨ。もういいんだよ。俺は龍神じゃないんだ」

イヨが思いのほか虚ろな顔で俺を見る。もうそんな事、どうでもいいって顔だ。運命に絶望し、何もかもあきらめきった顔だ。

「ごめんな、イヨ。結果的に騙すみたいな事になっちゃって」

「いいえ。そんなの……気にしてませんわ……」

虚ろな目のままで力なく首を振る。

とても気にしてないようには思えない。それどころか、この事実彼女の心に立ち直れないぐらいのダメージを与えてるように思える。そりゃあそうだろう。絶望の闇の底からやっと思い出したと思っただけが、またたく間に消えてしまったんだもの……駄目だ、このままだと、彼女はきっと本来の歴史の通りに自殺してしまうだろう。

「そっかあ、よかった。また失敗したかと思った。俺って、へまばっかの奴だから」

俺はわざとおどけた調子で言った。イヨの顔に少しだけ生気が戻

る。

「でもさ、あんまり気を落とすなよ。騙したとか、騙されたとか、裏切ったとか、裏切られたりとか、そんな事は世間じゃよくある事なんだからさ。そりゃあ、悪意を持って、人を騙したり、裏切ったりするようなのは最低だし、分っていないながらそんな事をして、良心もいたまないような奴は最悪だけどさ、でも、時には、別に悪意があったわけじゃなくて、よくよく分ってみれば、ほんの心のすれ違いだったなんてこともあったりしてさ……」

「……？ あなたは、何をおっしゃりたいんですの？」

「だから……その、つまりさ」

俺は言う。

「こんな事ぐらいで……こんな、俺みたいなの、くだらない奴の嘘ぐらいでさ、人生悲観して、自分の命を粗末にするなって……絶対に死のうなんて思うなよって……」

その言葉に、イヨがはっと目を見開く。そして、その透き通った瞳でまっすぐに俺を見る。俺は言葉が続けた、

「生きていれば、きっと良い事もあるはずだから。だから、約束してくれ。絶対に自分で自分の命を絶ったりしないと……」

イヨの目からみるみる涙が溢れ出す。

「約束するな？」

「……わ」

「え？ 何？」

「あなたは……あなたは、くだらない人なんかではないですわ」

「そうか、ありがとう。イヨだけだよ、そんな風に言ってくれたの。俺ってほらドジばかりだからさ」

「ううん」と言ってイヨが笑顔を見せる。

「最後に、覚えといってくれ。俺の本当の名前は、青空太陽っていうんだ」

「あおぞら……たいようさま？」

「ああ。あの、太陽を見た時は俺を思い出してくれ」

「……はい……でも冥界で太陽が見られるかどうか」

「それじゃあ、いつも心の中に太陽を思い浮かべていればいい。そうすれば、冥界の闇の中でもイヨの周りだけはいつも快晴だ」

「そうですね……そうですわね。そうしますわ……」

「話は終わったか？」

剣を持った兵士が言った。

俺は男を見上げる。こいつが、死刑執行人にちがいない。

「慌てるなよ。もう少しだけ。待ってくれ」

俺は自分でも驚く程落ち着いた声で答えると、最後にもう一度イヨを見て言った。

「さあ、俺の目を見てちゃんと約束してくれ。絶対に自分の命を絶たない」と

「約束します……」

イヨが涙を流してうなずいた。

「いつまで待たせる？ もういいだろう？」

死刑執行人が言う。

「ああ。もういいよ」

俺は覚悟を決めてうなずいた。

こうして、俺は執行人にひたたてられ、村人の罵声の飛び交う中、広場のど真ん中へと連れて行かれた。

「首を出せ」

執行人が言う。どうやら、俺は斬首刑に処せられるらしい。いわれるままに首を差出すと、首筋にひやつとした感触がした。剣が置かれたためだろう。しかし、不思議と心は凜いでいた。先ほどまでの恐怖ちが消え、無気味な程落ち着いている自分に自分でも驚く。どうしたんだろう？ かつてない心境だ。心のどこかで、こんな声が聞こえる。『何一瞬さ。痛くも痒くもない』と。奇妙だな。前にもこんな事があった気がする。『そうさ、前にも同じようにして殺されたんだよ』誰かの声がした。誰だ？ 俺は、意識の奥底へと耳を傾けた。そうしているうちに、やけに透き通った自分を感じ始め

る。そうだ、俺は透き通っていた。透き通り、中は虚ろになっていた。そして、その空っぽになったまん中に、銀色の光を放ち回転する珠があるのを感じた。なんだろう？　これは。

執行人が剣を振り上げる気配がした。

いよいよ、終わりの時が来たようだ。

村の連中が固唾をのんで俺を見ているのが分かる。その中にモヨがいて、どんな顔をしているのかと思ったら目を赤くしていた。泣いてくれてるんだ、一応。短い人生だったが、あばよ、みんな。

ひゅっと風がうなり、剣が落ちてくる。俺は全てをまかせようとした……が、その時、

駄目だ！　まだ死ねない！

唐突に思う。

俺は、まだひとつだけ大事な事をイヨに伝えていない！

生きたい！　そう思ったとたん、俺の中にあった銀色の何かが回転しながら八方に膨らみ、弾けるのを感じた。「待ってくれ」と俺は叫んだのかもしれない。だが、それとほとんど同時に、首の中心を冷たい風が貫き吹き過ぎるのを感じた。

ならぬ！

誰かが叫ぶ声が聞こえる。

その少年を殺してはならぬ！

俺の目に白馬にのり駆けてくる美しい女性の姿が見える。その女性
性は、背後に天まで轟くかのごとき水竜を従えている。その情景を
最後に、俺の意識は途切れていった。

闇の中。俺は声をひそめて『その』機会を窺っていた。

垂らされた幕の向こうに2つの台座が見える。その青磁でできた台座の上には2つの宝玉が飾られていた。

そのうちのひとつ。右の珠は、あたりに雫をまき散らすかのごとき銀の光を放っている。そして、もうひとつ。左の珠は、その中心に周りの全ての光を飲み込むかのごとき闇をたたえている。

その頃の俺は、とある王に仕える一介の雑兵だった。

けれど、元々この国にいたわけじゃない。昔は海の側の国で海人として生きていた。

……あれさえ奪えば……

銀色の光る珠を見つめて俺は思う。

……あれさえ奪えば、この戦いは終わり、あの方も救われるはずだ……

けど、あの珠の側には、いつもアイツがいた。あの方によく似た顔だちのアイツ。アイツにとって、あの珠は、戦を連戦連勝に導くための唯一無二の切り札だから、常に奪われぬよう目を光らせていなくてはならないのだろう。

けど、俺はあきらめなかった。いつか絶対に奪う機会はあるはずだと思っていた。そして、今がその時だ。アイツは病に冒され、ここ数日眠り込んでいる。見張りの兵隊もうたた寝をはじめた。昼間のうちに奴らの酒に混ぜておいた眠り薬が、ようやくきいてきたようだ。

息を殺して闇を踏み出すと、俺は台座の上の銀の珠をそっと手に取り懐に入れた。そして、何食わぬ顔で幕屋の外にでる。ところが、一歩踏み出したところで、見張りの兵士に見つかってしまった。

『なんだ？ お前は？』

『……見ての通り。味方の兵隊だ』

『ここは雑兵の立ち入れるところではないぞ』

『うっかり、迷い込んだだけだ。ここはどこだ？』

『ここは、王の幕屋だ』

『そうか、それは気付かなかった。すぐに持ち場に戻る』

そう言っ、何食わぬ顔をして歩き始めた。入り口の柵さえ越えればこっちのものだ。そのまま珠を持ってどこかへ逃げてしまえばいい。

ところが…

『おい！ 珠が、珠が消えてるぞ！』

誰かが叫ぶ声がある。

まずい。もう、ばれてしまったらしい。俺は、歩調を速めた。

『待て！ お前……！』

兵士の声がある。

けど、俺は気付かぬふりをして歩き続けた。

『おい！ 待て！ 待たぬか！ 誰かあいつを捕まえろ！』

その言葉を合図に、八方から兵士が現れる。

恐ろしくなって、俺は走り出した。

すぐ脇を、矢が飛んでくる。

雨のように矢が降り注ぐ中を、逃げて、逃げて、逃げまくった。

命からがら逃げ延び、岸壁に辿り着く。足元を見下ろせば、真っ暗な海がうねりを上げている。波間に白くはぜる飛沫を見ながら、俺は考える。

この珠をどうしようか？ 海に捨ててしまおうか？ いいや、海は駄目だ。海に捨てればきっと海神の手に渡るだろう。そして、海神から再びあいつの手に渡るに違いない。海だけは、絶対に駄目だ。しかし、それなら、どこに捨てるのが良い？ どこに捨てようが、この珠の魔力が奴らを呼び寄せるに違いない。きっと、この世界に安全な場所なんかないんだ。だったら、いっそ……。

思案の末、俺は珠を飲み込む事にした。自分の体の中が一番安全に思えたからだ。

それから、俺は、一人他国へ逃げた。故郷の海の側は避け、誰も知らない遠い国へ……。そこで出会った女と夫婦になり、数年は平和に暮す事ができた。しかし、珠の力が引き寄せたのだろう。追っ手は迫り、ついに俺は捕らえられた。

……珠はどうした？

俺の王にそっくりの顔であいつは言った。

……飲み込んだしまった。

わざと薄ら笑いを浮かべてやる。

……飲み込んだだと？　なぜ、そんな事をした？

……別に。そうすれば、珠の力が手に入ると思ったからさ。結局無理だったけどな。

……愚か者が。こやつ首を刎ねてしまえ！

こうして、俺は首を刎ねられた。動かなくなった俺の体を切り刻んで、あいつは珠を探し出した。珠は見つかったが、その光は失せ、その力も消えていた。

……ざまあ、みろ。

俺は中空から笑ってやった。

……珠の力は俺が『ここ』に取り込んだよ。

そうして、俺は魂になったばかりの自分の胸のあたりを見た。そこには、銀色の珠が雫のごとき光を放ちながら燃えていた。

……これで、もう安心だ。

俺は安堵のため息をもらすと、珠を抱えたまま、次の生にうつるべく天に向かって昇って行った。

「へえ。おもしろいな」

……？

「伝え聞いてた話と随分違うけど、それが真相だったんだ」

……誰だ？

「でも良かったじゃないか。とりあえず、お前はただのマヌケじゃなかったって事が分って」

目を開けると、そこは漂う雲の中だった。遠くに稲妻がきらめくのが見える。音はなく、まるで天と地を結ぶ光の梯子のようだ。凄まじく美しい。

しかし、ここはどこだ？

「ここは、生と死のはざまの世界さ」

また、あの声がする。誰だか分からないが、生と死のはざまの世界という言葉で、少しだけ記憶がよみがえってくる。

そうだった。俺は死んだんだった。珠を飲み込み、首を刎ねられて……。でも、もう、大丈夫だ。珠の魔力は俺が魂に取り込んで持って来たから。

確認するように俺は自分の胸のあたりを見る。そこでは、銀色に渦巻きながら光る珠がある。

これさえ、ここに持って来れば、二度と争いは起きないはずだ。これが地上にあったがために、あんな理不尽な事になってしまったんだから。

それから、俺は俺達の本当の王の事を思い出してみた。俺達の本当の王……海幸彦のこと……。

「おいおい」

また、あの声がする。

「いつまでそんな古い時代の思いにとらわれているんだよ？ 確かにお前はその珠を飲み込んで、首を刎ねられて死んだ事もある。けどそれは大昔の話さ。それからお前は何度も転生を繰り返して、今は違う人生を生きているんだ」

「うるさい奴だ。一体誰なんだ？ さっきから俺の耳もとでごちゃごちゃ言ってるのは……」

「後ろだよ、後ろ」

言われて振り返ると、そこに一匹の龍がいた。青みがかった銀色のうろこを持つ、とてつもなく美しい龍だ。あまりの美しさに圧倒されて眺めていると、やがて龍は一人の童子に姿を変えた。

「ほら、思い出しただろう？ 俺だよ、俺。リバー」

「？ リバー？ そんな奴知らない……」

「マジかよ。大丈夫か？ 青空太陽」

「青空太陽？ ……なんだ？ それは」

「おいおい。自分の名前も思い出せないのか？ 困ったもんだな。珠を飲み込んだ記憶がそんなにショックだったのか？ じゃあ、これならどうだ。竹千代……」

「！」

その言葉には聞き覚えがある。

「竹千代……そうだ、思い出したぞ！ 竹千代！ お前は俺にとりついていた龍神のガキで竹千代……！ そして、俺は究極の雨男！」

「って、そこで、思い出すかよ……」

龍神のガキが仏頂面をした。

そうだ。俺の名前は青空太陽。私立剣ヶ丘高校2年C組 出席番号1番。こないだ彼女にふられたばかりの究極の雨男だ。

「大正解」

竹千代がうなづく。

「しかし、思い出すまでに、またえらく遠回をしたもんだな。まさか過去の人生を追体験して来るとは……」

「過去の人生？ 追体験？」

「そうだよ。今しがた、珠を飲んだ時の人生をやり直したろう？」

「ああ……あれは、追体験っていうのか？ 不思議な感覚だな。とつともなくリアルで、あの世界での自分の名前まで覚えてる。俺の名はイサリビ。漁師だった……あれが、過去の人生って事は……？」

「前世さ。前に言っただろう？ イヨ達の暮す古代の世界からさらに1000年前に、お前の前世だった男が『シオミチノ珠』を飲んだ話。その時の人生を追体験して思い出したんだ」

「『シオミチノ珠』か懐かしいな……。でも、なんで、そんな事を今思い出すんだろう？」

「さあね。この空間のせいじゃないのか？ 生と死のはざまの世界でも、魂の記憶を思い出したりする事はある」

「生と死のはざまの世界か……」

それは、さっきもこいつに言われた言葉だ。あの時は頭がぼんやりしていてあんまりピンと来なかったけど、意識がはっきりした今は、色んな事を思い出す。

「そうだ。俺は青空太陽の人生でも斬首刑で死んだんだっけ。そういえば、あの時、この『シオミチノ珠』が反応したよ」

そう言って、俺は胸で輝く銀色の光の珠に触れる。

「長い事、これの力を魂の中に抱え込んでいたけど、あんな風に反応したのは初めてだ。……だからかな？ イサリビの頃の夢を見たりのしたのは」

「凄く興味深い話だけど、残念な事にお前はまだ死んでないよ」

「え？ 死んでいない？」

「まだ腹にシルバーコードが繋がってる」

言われて腹を見ると、へその辺りから銀色の糸が出ている。

「それが、シルバーコード。肉体と魂を繋ぐ糸さ。それがきれない限り、人は死ぬ事はない」

「ふーん」

俺は、まじまじとその銀色の糸を見つめた。

「妙だな。確かに首を斬られたと思ったのに。失敗したのかな？」

首をかしげる俺に向かって竹千代が「さあな」と答える。

「けど、良かったよ。あんな変な世界で、あんな風に死んだら成仏するにもできないもんな」

「まったく、悪運の強い奴だよな」

竹千代が憎まれ口を叩く。俺の方もすっかり意識がクリアになって、普段の調子が戻って来た。それとともに、色々と怒りが込み上げてくる。なにしろ、こいつのおかげでさんざんな目にあったのだから……。

「おいおい、俺を責めるのはおカド違いだろ」

竹千代が言う。

このガキは、また人の心を読みやがったらしい。ますます腹が立つてくる。

「何がおカド違いだ。そもそも、あの時、お前が俺とイヨを見捨てずに雨の1滴も降らせてくれてりゃ、こんなひどい目にあわずに済んだろうに」

「あの時って、ああ、イヨが男達に冥界に連れられそうになってたのをお前が止めようとした時の事か？」

「そうだよ。あん時、お前あきらかに俺達を見捨てただろう？ あれだけ、雨を降らせてくれて頼んだのに」

「そんな事、あったっけ？」

「あったっけ？　じゃねーよ。お前、あんまり人間様をなめるなよ」

「そう、怒るなよ。みだりに人に力を貸すなかれ。これが神の世界のルールだもん。考えてみろよ、人間の願いを逐一聞いてたら世の中めっちゃめっちゃになっちまうだろう？」

「ふん。今さらもつともらしい事言うなよ。『全ての神が情け深くて慈愛に満ちているわけじゃない』だの『俺とイヨが死んでも構わない』だの『イヨを見捨てろ』だの、さんざん汚い事言いやがったくせに」

「『全ての神が情け深くて慈愛に満ちているわけじゃない』のは事実だし。人間2人が死ぬぐらい、神の俺には痛くも痒くもないってのも本当の事だし、『イヨを見捨て』れば全てが丸く収まったのも事実だから仕方がないだろう」

「……お前は、人として問題が有り過ぎる」

「人じゃないからね」

「神としても失格だ」

「神は、大きく世の中を見渡す事しかしない。その上で、聞き入れてもいい人間の願いしか聞かない。そうしなければ、世界は滅びる」

「じゃあ、どういう人間の願いなら聞くんだ？」

「そうだな。よほど、善行を重ねて、自己犠牲をも厭わない無私の人間の願いなら叶えられるかな。例えば……お前の世界だと、イエスとか、ブツダとか呼ばれているような奴のレベルに達すれば……」

「ほとんど不可能じゃないか！」

「あきらめるなよ。そこまでいけない奴の願いは、悪魔の連中が聞いてくれるさ。魂とひきかえにな」

「もういいよ。俺はどうせ俗物ですよ。フン！」

「俗物なのは事実だけど、そう悲観する事もない。お前は、ひとつ良い事をしたじゃないか。命を投げ出してまで、イヨを助けようとした」

「今さらおだててもらっても1円の得にもならないね」

「金に換算するところが俗物丸出しだな。しかし、今のお前になら条件付きでだが力を貸してやれない事もない」

「何？ どうした？ 急にいい奴になって」

「まあ、聞けよ。さっきも言ったとおり、お前は、命を投げ出してまでイヨを助けようとした。これは大いなる自己犠牲の精神だ。この事で、お前の魂の純度は格段に上がった」

「純度が上がったって？」

「お前、剣を首筋に当てられた時に感じただろう？ 自分が純化されて行く感じ」

「そういえば、あの時。体が透明になって行くような気がした……その時、体の中心に何か凄い暑いエネルギーみたいなものがあるのを感じた……あ、もしかしてあれが……」

「そうだ。『シオミチノ珠』の力さ。お前が『シオミチノ珠』の力を引き出せたのは魂が純化され、そこに意識が届くまでになったからさ。鈍い魂の中では宝玉もその力を眠らせるよりない」

「そうか……」

つぶやくと、俺は自分の中で燃えている銀色の光の珠を見つめた。

「まだ、完全に純化はされてないから、無条件で願いを聞く事はできないが……私利私欲の事以外で、条件付きでなら力を貸す事ができる。で、その条件だが……」

「ああ。いいよ。その話なら」

俺は即座に首を振る。

「良いつて？ どうして？ またとないチャンスなんだぞ」

「だって、俺、地上ではもう龍神じゃないって事で話ついてるし、いまさら雨なんて降らす必要無いもん」

「馬鹿だなあ。俺の力は何も雨を降らすだけじゃなく、お前の持つ珠の力を合わせれば……」

龍神のガキは、まだ何か言っていたけれど最後まで聞く事はでき

なかつた。なぜなら、それより先に俺の魂が地上に引き戻されたためである。

「おい、生き返ったぞ」

「生き返った！」

騒々しい声が、四方から聞こえてくる。なんだろう？ うるさいなあ？ ここはどこだ？ 俺は何してるんだ？ 必死で頭を働かせるが、何ひとつ思い出せない。

「龍神様！」

視界の中に、いきなり女の子の顔が入ってくる。しかも、どアツプだ。一瞬焦る。が、その顔には見覚えがあった。

「イヨ……」

その名を呼ぶと、イヨの目に、みるみる涙が盛り上がってくる。そして、彼女は泣きながら抱きついてきた。

「龍神様！ 龍神様！ 龍神様！」

甘い匂いとともに、柔らかな髪がかぶさって来て……

「ちょ……ちょっと、待って」

と俺はうろたえながら起き上がった。

「おい、起き上がったぞ」

再び声がする。誰だよ？ うるさいな？ つぶやきつつ辺りを見回す。そこにはたくさんの人がいて、俺とイヨを取り囲んでいた。見覚えのあるツラばかりだ。それで、徐々に記憶が戻ってきた。そうだ、ここは古代で、邪馬台国の村で…、俺は死刑判決を受けたばかりなんだ。信じられない話だが、俺があゝの生死のはざまの世界で前世を追体験していたのはほんの数分の話だったらしい……。

「処刑は、まだ終わっていないのか？」

俺はイヨに尋ねた。すると、イヨは首を振った。

「いいえ。もう、終わりました。あなたは、先程首を斬られたのです」

「首を？」

驚いて首に触れてみる。しかし、首はしっかりと繋がっているように思われた。

「くつついてるじゃないか。冗談言うなよ」

「ううん」イヨは首を振った。

「本当に斬られたのです。けれど、すぐにババ様が繋げて下さったからあなたは死なずに済んだのです」

「嘘だ。斬られた首を繋げられるはずがない」

「普通の人には無理でも、ババ様ならできるのです」

さつきから、イヨはやけにババ様、ババ様と繰り返す。

「ババ様って、一体誰さ？」

「すぐそこにおられますわ」

イヨが俺の背後を指さす。

斬られた首を繋げられる人間が、この世にいるはず無い。それが21世紀における常識だ。しかし、ここは古代だ。もしかして、そういう事もあり得るのかも知れない。けど、そんな事ができるババアは、さぞか醜怪な妖魔みたいな奴にちがいない……などと思いつつ振り返る。すると、そこには、一人の女性が立っていた。イヨ達と同じ巫女の装束を身にまとい、長い黒髪を後ろに束ねた、切れ長の目の美人だ。この人には見覚えがある。そうだ。さっき、意識を失う直前に見たあの人だ……しかし、『ババ様』という名にふさわしき老婆の姿は見当たらない。

「バアさんなんてどこにも居ないじゃないか？」

「いいえ。おバアさんじゃありませんわ。後ろのその方がババ様ですわ」

「はあ？」

俺は、もう一度振り向いた。そこには、先ほどの女性……どう見ても20代半ばにしか見えない……が立っているだけだ。

「まさか、この人のことか？」

「ええ、そうですわ」

「冗談言うなよ。失礼だろう？」

「いいえ。冗談ではありません。この方がババ様です。シキ子様とおっしゃいますわ」

イヨの言葉に、ババ様と呼ばれた女性は「ふふふ」と笑った。怒らないってことは、本当なのか？

「じゃあ、本当に、あなたがババ様？」

尋ねる俺に、ババ様と呼ばれた女性はにっこりとうなずいた。

「はじめまして、太陽殿」

「は……はじめまして」

緊張のあまり言葉が震えてしまう。と、ババ様はこちらに手を差

し出し、俺を立ち上がらせ、村人達に向かって叫んだ。

「ごらんのとおり、この方はよみがえりました。この少年がただの人間なら、いかに私の呪術の力をもってしてもできぬ事。」

はい？ その言い方、まるで俺が人間じゃないみたいなんですけど？

あっけにとられる俺をよそに、古代人達が喧々轟々となる。

「じゃあ、そいつがカミビトとでも言うのか？」「とてもそうは言えない」「これは、シキ子様がイヨを助けるために儲けたはかりごとだ」などなど……。その騒ぎを抑えるべく村長が杖で地を叩き叫んだ。

「静まれ！ これは神聖なるサニワである。卑しき言霊を放つのはひかえよ」

まさに鶴の一声。村長の言葉にそれまでざわめいていた広場がシーンと静まる。頃合を見計らって村長がシキ子様に尋ねた。

「では、その男がまさしく龍神だとシキ子殿は申すのか？」

すると、シキ子様は首を振った。

「いいえ。この方は神の眷属ではありません」

「ほう？」

「しかし、ただの人でもありません」

「では、カミビトと申すか？」

「それは……奇妙なのですが、そうとも思われたいのです」

「では、一体そいつは何者なんだ？」

また、村人から野次が飛んだ。

「分かりません。一つだけ言えるのは、この方が何か非常に大きな力に守られているという事。でなければ、あの状況から蘇るなどで

きません。そして、もう一つ。私には見えるのですが、この方のまとう光はこの世界の人々のものとは、まったく違います。このような複雑な光をまとう者に会うのは、この世では初めてです」

「ふーん。しかし、それだけでは、この者の命を助ける理由にはならぬな」

「どうやら、シキ子様に命を救われたものの、まだ俺の死刑執行はチャラになったわけではないらしい。

「しかし、オサ様。オサ様も見られたでしょう。あの水竜を。あれは、この者が産み出したものです」

「なんだと？」

再び村人達がざわめきはじめる。

「水竜って、さっきババ様が連れて来たアレか？」

その水竜には俺も見覚えがある。さっき、シキ子様がやって来た時背後に引き連れていたあれの事だろう。けど……あれを産み出したのが俺だって？

「あれは、ババ様が呼び出したんじゃないのか？」

村人の声。

「違います」

シキ子様は、はっきりと否定した。

「ご存知のとおり、私は地の属性に携わるもの。水の属性を持つ水竜を呼び出すことなど叶いませぬ」

「シキ子殿にもできない事が、その子供にできたというのか？ 信じられぬ。もしや、その2人を庇おうとして、嘘をついているのではあるまいな？」

「いいえ。村長様。私は誰も庇いませぬ。あの水竜は、確かにこの少年の産み出したモノ。その証拠に、この少年がことされると同時に姿を消しました」

「なるほどな」

村長はうなずいた。

「確かに、その少年には異能の才があるようだ。しかし重ねて言う

が、だからといってイヨの冥界行きをさまたげる理由になるかな？

我々はイヨに龍神を呼び出せと言ったのだ」

「そうだ。そうだ」

村人達が騒ぎ出す。

ああ。その事もまだ未解決だったか……。

そっと、横に立ってるイヨを見る。彼女は思いのほか落ち着いてるように見えた。けど、それが虚勢なのはすぐ分った。僅かに肩が震えていたからだ。俺はイヨの肩に手を置いた。イヨがビクツとしてこちらを見る。……大丈夫だよ……励ますように笑顔を浮かべる。俺にまかせろって。

そう。だんだん、はつきり思い出して来た。あの時……死ぬまぎわ……俺は、イヨに言わなくてはいけない大事な事を思い浮かべていたんだ。今こそ、それを言う時だ。それは村長の顔をまっすぐに見る。

「なんだ？ 何かわしに言いたい事でもあるのか？」

村長が訝しげに尋ねる。俺は頷き答えた。

「はい。イヨが龍神を呼び出したかどうかについてですが……これは、俺の個人的な意見ですけど……彼女は龍神を呼び出したと思うんです」

「え？」という風にイヨが俺を見る。

「どういうことだ？」と村長が言う。

「はい。シキ子様の言うとおりで、俺はこの世界の人間ではありません。未来の人間です」

「未来？」

「そうです。今から、2000年……もしかすると、もっと先の未来の世界からやってきました」

「未来とはなんだ？」

「……明日の、明日の……ずっと明日の世界です」

「では、お前は遠い明日から来たと申すか？」

「はい。村長様」

「信じられるか、そんな話」

「明日からなど、どうやって来る？」

また、村人達が騒ぎ出す。まったくうるさい連中だよと、俺は振り返って答えた。

「イヨに呼び出されたんだ。正確に言うと、イヨに呼び出された龍神と一緒に」

「はあ？」

村人達が首をひねる。意味が分からないらしい。

「俺には生まれつき、龍神が憑いてるんだ。その龍神が呼び出された時に、俺も一緒に巻き込まれてここにやってきたんだ」

そこまで言うと、俺は村長に向き直った。

「つまり、そういう事です。イヨは確かに龍神を呼び出したんです。彼女は役立たずでも、お荷物でもありません……と、いうことで……」

次に、俺はイヨを見た。

「と、いうわけで、イヨはもっと自信を持っていいって事」

そう、これだ。この言葉が、伝えたかったんだ。

イヨは、あっけにとられ、次に泣きそうな顔をして、最後に笑顔を見せた。……しかし

「そんなことは、もう、どうでもいいんだ」

ずっと黙って事の成りゆきを見守ってたサカマキの声が、俺らの間に漂う甘い感傷をぶちこわす。

「お前は自分に龍神が憑いてると言うが、その証はどうやってたてる？ さっきだって、雨を降らせられなかったじゃないか？」

「それは……」

俺は口ごもった。確かに、俺は龍神に憑かれているだけで、自分の意志で雨を降らせる事はできない。

「肝心なのは、俺達の望む時に、イヨが雨を降らせられなかったって事だ」

「……」

言い返せない。ちくしょう。こんなことなら、あの生死のはざまで奴が力を貸すといった時に聞いておけばよかった。そうすれば、今すぐ雨を降らせて見返してやる事ができたのに……歯噛みしたその時、

「もう、いい加減にしろさいよ。あんた達」

聞き覚えのある、陰のある声が聞こえた。

みな、……もちろん俺も……驚いて一斉にモヨを見る。

「あのマヌケ面がこの世界の人間じゃなくて、しかも何だか分からない力を持って、それをイヨが呼び出したって言うんだから、それでもいいじゃない。イヨの力を認めてあげなさいよ」

なんだ？ お前。俺達を庇ってくれるのか？

あっけにとられる俺らの前で、モヨはどんどんエキサイトしてくる。

「もう、こんなのやってられないわよ。おかしいわよ、こんな風習。生贄だの、首斬りだの！ ばっかみたい！」

昨日の晩は「仕方ない」って言ってたくせに、内心はおかしいと思っていたのか？

「言葉が過ぎますよ。モヨ」

シキ子様がやんわりと諫める。

「モヨが言うまでもなく、イヨを冥界にやる事は反対です。イヨだけでない。こんな誤った風習は、すぐにでもやめさせなくてはいいけません」

「ババ様、あんたは、そう言うと思ってたさ」

サカマキが言った。

「俺達だって、できればこんなムゴい事はしたくない。けど、みんな生きていかなければいけないんだ。生贄は闇が居るこの世界に生まれ、俺達の宿命だ」

「いいえ。あきらめる事はありません」

シキ子様は首を振った。

「占いにはつきりと出ています。もう間もなく闇は消えると」

「ババ殿の占いを信じないわけじゃない。だが、あのように、日々闇は広がって来ている」

サカマキが天を仕切る闇の壁を指さした。

「確かに、闇は広がっています。このままでは、世界は闇にのまれるかもしれません。しかし、その前に消し去る事はできます。そのカギを以前はイヨが……そして、今は、イヨとともにその少年が握っていると、占いがはつきり示しています」

なんだって？

俺は仰天してイヨと顔を見合わせた。

俺が闇を消し去るカギだって？

12 (後書き)

ちよつと微妙に手直ししました。「分かりづらい」とか「ここ矛盾してるよ」とかいうのがあったら遠慮なくご指摘ください。しかし、シキ子様をババ様扱いは、ちよつと気の毒だったかな……

「ほう」

村長が興味深げに俺を見た。

「イヨだけでなく、この少年がこの世から闇をはらう力を持つと……？」

「はい」

「しかし、以前のそなたの占いではそのような卦はでなかったはず」「数日前に、急にこの卦が出たのです。それで、慌てて旅を中断し、村に戻って来たのです」

「では、世の流れがかわったと申すか？」

「はい……なにが原因かはわかりませぬが……。一つだけはっきりしているのは、この少年とイヨを殺すような事があれば、この世から光は消えて無くなるという事です」

「ふー……む」

村長が再び鋭い目で俺を見た。

「なるほどな……。しかし、この少年はともかく、イヨの方は守りきれるかな？ 冥界からは今日にもイヨを寄越せとの催促が来てるというぞ」

「それについても、心配ございません」

そう言うと、シキ子様は懷からふたつの釣り針を出した。金色に輝く美しい針だ。それを見たときに村長の顔色が変わった。

「それは？ ……まさか」

「お分かりですか？ これが、すべての元凶。そして、奴が求めてやまなかった物です」

何の話かは分からなかったが、奇妙な事にその二つの針に見覚えがあるような気がする。そう。確かに俺はあれらを知っている。しかし、どこで見たんだろう？

「本当は、もう一つ探し出したい物があったのですが、叶いません

でした。しかし、この二つだけでも差し出せば、きっと彼奴はイヨをあきらめてくれるはずです」

「……うーむ……さすがはシキ子殿だ」

村長が感激してしきりに首をひねる。

「よし、では後の全てはシキ子殿にまかそう。これにて、審議を終わる」

こうして、恐ろしい裁判の幕は閉じた。

不平たらたらの者、安堵の表情を浮かべる者。様々な顔をして村人達は去っていく。そして、最後に残されたのは、イヨと、モヨと、俺と、そしてシキ子様の4人だけだった。

「大陽様！」

イヨが駆け寄ってくる。

「よかったですわ。本当に。大陽様の首が刎ねられた時は、私、本当にどうしようかと……」

「ありがとう。でも、イヨもよかったな。冥界に行かなくてすむかも……で」

「……はい」

イヨがにっこりとうなづく。

「本当に、良かったわね」

シキ子様も微笑みながら近付いてくる。

俺は改めてシキ子様を見た。長身で細面の涼やかな瞳。黒髪に白い肌が映え、凜とした雰囲気……イヨとはまったく正反対の純和風の美女だ。しかし、それだけに、俺は首を傾げた。

「どうしました？」

「いえ。そんなに若くて美しいのに、どうしてババ様なんて呼ばれてるのかと思って……」

「ババ様と言うのは、職名なのですわ。村で一番年上の巫女に与えられる称号です。もちろん、呪術に優れているのが条件です」

イヨが教えてくれる。

「称号？ ああなる程。けど、俺、昨日シキ子様より年上の巫女さんも見た気がするんだけど」

「ババ様は、そう見えても258才なのよ」
今度はモヨが教えてくれる。

「に…にひゃくごじゅうはちいい…?」

シキ様様が咳払いする。

「モヨ、よけいな事は言わなくてよろしい」

「…すいません」

モヨが小さくなる。

「けど…258才なんて、あり得るんですか…?」

「あり得ますわ。ババ様はカミビトですから。カミビトの寿命は人間には、計り知れませんか」とイヨ。

「あの…その、カミビトってなんですか？ さっきから何度もおっしゃってるようですけど」

「神と人とのあいの子の事ですわ」

ああ。なる程。つまり神と人間のハーフって事か。それを、漢字で著すと、神人と書いてカミビトとなるってことだ。

「でも、神様と人の混血なんているの？」

「いるわよ。最近めっきり減ったらしいけど。あの、長様だって5代前まで遡れば神の血が混じってるって話よ。5代も経つと感覚的にはほとんど普通の人間と変わらないらしいけど、でも、見るからに威厳があるでしょ？」

モヨが言う。

「ちなみに、オサ様は今年で120才ですよ」と、イヨ。

「120？ どう見ても60代ぐらいに見えたけど…でも、シキ様の258才にくらべれば老けてるか」

「年の取りかたは、神の血の濃さで違ってくるみたい。ちなみに、

私、モヨはただの人間」

「私、イヨは不明ですわ」

「ふうーん……」

何だか、とてつもない世界みたいだ。この先やっていけるのか少し不安になる。

「あのー……それで、もう一つ聞いていいですか？」

「なんですか？ なんでも聞いて下さい」

シキ子様がにこやかに答える。

「えーと、じゃ遠慮なく聞きますけど、さっき『光をまとう』とか何とかおっしゃってましたけど、その『光』ってなんですか？」

「ああ、それは霊の光の事です。人は皆、目には見えない霊の光をまとっているのです。神の血を強く受け継ぐ神人や、霊能力を持つ人間には見る事ができます」

「ああ。分った。それって、オーラの事ですな」

「オーラ？ さあ、そのような言い方は聞いた事無いのですが……」

「俺の世界ではオーラと言うのです」

「そうですか。太陽様の住む世界の話もゆっくりと窺いたいですね。けれど、今はそれより先に冥界に使者を送らなければいけません」

「使者？」

俺は首を傾げた。

「ええ。先ほどの釣り針とひきかえに、イヨの冥界行きを諦めてもらうための使者です」

ああ、なる程。

「うわあ、それでは、またシキ子様の蝶が見られるのですね」

イヨが嬉しそうに言う。

蝶？ てふてふ？ 何だ？

ふたたび首をかしげる俺の目の前で、シキ子様は人さし指を口の前に立て「ふっ」と息を吹き掛けた。すると、その指先に1匹の美しい蝶が現れ、震えるように羽をはためかせた。

「さあ、冥界へお行き。そして、私からの言葉をあの男に伝えてち

ようだい『お前の欲しい物がここにある。それをやるから、イヨの事はあきらめてくれ』と」

蝶はうなずくように羽を震わせたかと思うと、滑るように宙へと舞い上がって行った。

「あ……あれが使者？」

俺は驚いた。ていうか、驚き過ぎで、既に感覚が麻痺してるんだけど。

「大丈夫なんですか？ 途中で蜘蛛とかに食われない？」

「大丈夫です。あれは、か弱く、はかなげに見えるが、鱗粉に猛毒を持っているから誰も手出しはできませんぬ」

「そ……そうですか」

俺は固唾をのみ、蝶の舞い行く軌跡を見守るばかりだった。

13 (後書き)

補足説明

神の眷属↓純粹な神の眷属。必ずしも慈愛に満ちてるわけじゃない
そうです。登場人物の中では龍神の竹千代。ホデリの命など

カミビト

神人↓神と人とのハーフ。神の血の濃さにより、術を使う事が出来ます。神の血が薄いと普通の人間とほとんど変わらず何の術も使えません。訓練すればかなり高度な術も使えるようになります。この村では各々の役割により術を修得したりしなかったりしてます。

ムラオサ

登場人物の中では、シキ子様と村長です。

シャーマン

巫女↓説明不要でしょうが……。まじないで病を治したり、国の安定を願ったり、占いで未来読みをしたりします。神を体に降ろす口寄せもするようです。龍神を呼べる太陽は、これに近いかもしれません。

さて、シキ子様が蝶の使者を送ってしまったと、何もやる事のない俺は祭殿の片隅でひと休みする事にした。なにしろ、夕べはろくに寝てない上に、精神的にも肉体的にもくたくたになってる。いつ冥界からの襲撃があるかも知れないけれど、少しでいいから眠りたかった。

ところが、床の上に体を横たえ目を閉じてても、頭が冴えて眠れない。色んな事が思い浮かんでくるのだ。21世紀の家族や友人や学校の事。龍神のガキの『帰るのは無理』って言葉。そしてシキ子様の『俺とイヨが闇を消し去るカギを握る』という言葉……。

本当なんだろうか？　闇をはらう力なんて俺やイヨにあるんだろうか？　でも、もし、世界がこのまま闇にのまれてしまったら、俺は本当に21世紀に帰れなくなってしまうって竹千代は言っていた。だったら、戦うしかないんだろうか？　けど、リアルに戦闘なんてやだな。ゲームやテレビならおもしろいけど。冥王ってどんな奴なのかな？　きっと、バカでかくて鬼のような顔した怖い奴なんだろうな。けど、もしそいつがシキ子様の条件を聞いてイヨの事をあきらめてくれれば、戦わなくていいのかな？　それが一番助かるんだけど。それにしても、変な奴だよ。あんな釣り針欲しがるなんてさ。よっぽど釣りが好きなんだろうな。でも、奇妙なんだよな。俺はあの釣り針を見た事がある。どこで見たんだっけ？　どうしても思い出せないけど……もしかして、あの過去生……あのイサリビの時の人生で見たんだろうか？　……けど、あの夢（？）の中ではあんな釣り針は出て来なかった。といっても、もう、ほとんどちゃんと思いつけないだけだね……。あの夢の中にいる時は、何もかもが本当にリアルだったのに。本当にリアルだった。頬をなぶる風や、潮の匂いまで感じられたもの。でも、今は全てが霞がかかっているみたいにぼんやりしてる。思い出せるの『イサリビ』っていう自分の過

去世の名と『シオミチノ珠をのんだ事』と『海幸彦』という王の名だけだ……海幸彦……我らの王……海の国の幸せな日々……

思いの他長く寝てしまっただけ。目覚めると、あたりはすっかり茜色に染まっていた。

冥王の襲撃はあったのか、なかったのか？ 様子が知りたくて、俺は慌てて飛び起きた。

外に出ると、玉砂利の上で3人の娘が話してるのが目に入った。その中の一人はイヨで、他の2人は始めて見る顔だ。何を話してるのかと思って近付いて行くと、イヨが俺に気付き、嬉しそうな顔をする。それで、他の2人もこちらを見た。けっこう可愛い。けど、イヨにくらべるとひどく粗末な身なりをしてるし、ひどく痩せてるように思えた。

「起きられましたのね」

イヨが言った。

「ああ。すっかり寝ちゃった。ところで、この人達はイヨの友達？」

「そうです。なつめちゃんとあずさちゃんです」

「へえ、こんにちは」

軽くあいさつする。と、2人ともやけに怯えた顔をした。なぜだ？

「怖がらなくても大丈夫ですわ。太陽さんは、とても優しい方なのですよ」

イヨが優しく2人をいなす。すると、娘達が顔を見合わせ、おそるおそる言った。

「じゃあ、この方が龍神様？」

「いや、俺、龍神じゃないから」

俺はきっぱりと訂正する。

「ええ。この方は大陽様。神様ではありません。でも、神様のよう
に素晴らしい方です」

「やめてくれよ。俺は素晴らしくなんかから。それより、イヨ
にはこんな可愛い友達がいるんじゃないか」

そう言うところ人は嬉しそうに笑った。

「私達は友達……いいえ、友達以上の姉妹みたいなものなのですわ
イヨが誇らしげに言う。

「姉妹？」

「はい。私達、イヨちゃんと同じ日に市場から買われて来たんです。
それから、どんなに辛い日もみんなで励ましあって頑張って来たん
です」

あずさが言う。

え？ てことは彼女達は奴隷？

改めてみると、2人ともひどく荒れた手をしている。俺やイヨと
変わらない年なのに……。それで、あんなに警戒してたのか？ 少
なからずショックを受ける。

「今、私達イヨちゃんの事を喜んでいたんです」

「え？ なんで？」

目をあげると、

「実は、さっき冥王の影がやって来て、イヨちゃんを生贄としても
らうのはやめにするって言ったんです」

「え？」

俺は驚いてイヨを見た。

「本当に？」

「はい」

イヨが嬉しそうにうなづく。

「良かったじゃないか！」

「はい」

イヨが再びうなづく。

「でも、凄かったね、冥王の顔」

あずさが言う。

「何？ 冥王の顔も見たの？ 影が来ただけなんでしょう？」

「影は冥王から別れた一部。冥王の分身のようなものですから……」
イヨが言う。

以下は、冥王登場時についてのイヨの説明である。

皆が普段通りの生活をしていたところ、一陣の風とともに大きな闇色をした蛾が現れた。あまりの大きさと、その無気味な色に、皆近づく事ができずに眺めていると、蛾はみるみる姿を変えて長い黒髪の男になった。やがて、天に届く程の大きさにまでなると、男は言った。

「我は冥王なり」

「それは、とても恐ろしい姿でした」と、あずさが震えながら回想する。

「でも、とても美しい姿をしていました」と、これはなつめの感想。

その、おそろしくて美しい男は言った。

「シキ子殿の使者の言葉、確かにうけたまわった。私もこの村に『

あれ』がある事にちょうど気付いたところだ」

「『アレ』とは釣り針の事でしょう」とのイヨの言葉。「あんな物の存在に気づけるとは、そりゃまたとんでもなく敏感なこつて」と、俺。それはさておき、

「よくぞ見つけただと誉めてやろう」

冥王は偉そうに言う。

「あれこそ、私が長年の間全存在をかけて探し求めていた宝。それが手に入るなら、1人の娘ごとき、どうして欲しがろうか」

それから、冥王は釣り針を渡す日と場所を一方的に言い残すと、皆の目の前ですうっと消えて行ったという。

「本当に良かったね、イヨちゃん」

あずさが言う。

「私達、ずっとずっと心配してたのよ。イヨちゃんがいつ生贄にされるんだろうって」

「本当」

なつめがうなずいた。

「いくら、私達よりいい物を着て、良い物を食べさせてもらったって、生贄にされちゃうんじゃないじゃ可哀想よねって、ずっとあずさと話してたの。でも、生贄にならないんだから、本当にイヨちゃんは幸せよ。これからも、良い物を着て、お腹一杯食べさせてもらえるんだから。……同じ、買われて来た身分なのに……」

それを聞いて、イヨは悲しげに目をふせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7203o/>

太陽と海の皇子(旧題 奇跡の雨男)

2010年12月7日09時08分発行